

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.91
2006

8 月号

トピックス

阪大船ふたび！ 七大学総合体育大会開会式

クローズアップ

学際融合教育研究プラットフォーム

ナウススペシャル

環境リスク管理のための人材養成



大阪大学広報誌

2006 8月号

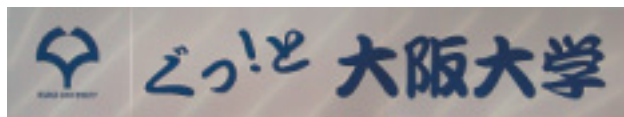
No. 91

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウスPECIAL	20
キャンパスニュース	22
表 彰 等	38
名誉教授の近況	43
人 事	44
名誉教授リレー随想	46
訃 報	48
インフォメーション	50
インタビュー	56
海外レポート	58
クラブ&サークル紹介	62
ガイドマップ	63
交流協定大学紹介	64



表紙写真：附属図書館生命科学分館(吹田)
撮 影：理学研究科助教授 山本 仁
表紙デザイン：株式会社ココティエ



司会の落語家桂かい枝さん(右)と鷲田清一理事・副学長



力強く選手宣誓を行う、真鍋バレーボール部主将

阪大船ふたたび！

- 天神祭「船渡御」に今年も参加。船上の大学間交流 -



大阪の夏を彩る天神祭。「大阪大学」の文字がうかびあがりました。

7月25日(火)、大川の水面に「阪大船」が帰ってきました。

日本三大祭の天神祭「船渡御」に、今年は「ぐっ！と大阪大学」をキャッチフレーズに参加しました。

当初天候が心配されましたが、出航時には薄日もさし、時折吹く、夕暮れ時の涼風が心地よい絶好の船出となりました。

詳細はキャンパスニュース(36ページ)をご覧ください。

七大学総合体育大会開会式

- 7大学による熱戦がスタート -

7月15日(土)、7年ぶりに大阪大学が主管を務める第45回全国七大学総合体育大会の開会式が、7大学の総長、副学長および体育会の学生代表列席のもと、本学吹田キャンパスコンベンションセンターで行われました。

開会式は、田村祐一大会実行委員長の開会宣言に始まり、前回優勝校の九州大学から大会会長である宮原秀夫総長に優勝旗・優勝杯が返還されました。

引き続き、宮原総長、田村大会実行委員長、鈴木健体育会委員長から挨拶があり、本学バレーボール部真鍋賢司主将から宮原総長に力強く選手宣誓が行われました。恒例のペナント交換では、各校から趣向を凝らしたペナントが本学に贈呈されました。続いて、今回の目玉である各校応援団からのビデオレターが披露され、各校の特色が出たユニークな内容に、会場は大いに盛り上がりました。最後に、本学応援団から参加選手へ向けてエールが送られ、開会式は終了しました。

場所を豊中キャンパスに移し、学生交流棟レストラン「宙」で行われたレセプションでは、各大学の総長が順番に力の入った挨拶を行い、自校の選手を激励しました。宮原総長は「是非皆さんの手で胴上げをしてもらいたい」と挨拶され、その言葉からは総合優勝を目指す強い意気込みが感じられました。

競技種目は、冬季2種目、春季2種目、夏季34種目の計38種目が行われ、約6,000人が参加します。夏季34種目は、7月初旬から約2ヶ月間かけて順次開催されています。

七大学ホームページ <http://www.7-u.jp>



列席の7大学の総長、関係理事等



実行委員会等のメンバーと宮原総長

変化する科学技術や社会に即応する学際融合教育研究への取組みを支援する

【学際融合教育研究プラットフォーム】

学際融合教育研究プラットフォーム教授 中 西 浩

■ 学際融合教育研究プラットフォームの設立経緯

日本は、科学技術や生産技術を駆使した製品を創出し世界市場を相手に高度成長を遂げてきました。物質的資源の乏しい日本が成長を継続するには、世界市場に向けて引き続き優れた製品を出し続ける以外に道はありません。一方で、地球温暖化や環境破壊、有限のエネルギー資源の減少など、製品の製造ひいては人類の生存、を脅かす現象が顕著になってきています。

このような状況下で、如何に自然界と調和して持続性のある発展を遂げていくかが、人類社会の大きな課題となっています。その結果、科学技術と社会あるいは人との関わりがその重要性を益々増すとともに、文理を問わない学際融合的な学問・研究領域の創出が必要となってきています。

幼稚園から大学、大学院まで、人は長い時間を勉強に取り組めます。そして、人は、世の人々の役にたちたい、と思っています。

人や地球や宇宙と調和することを大命題にして、人類社会の新しい発展の基礎となる技術、知識・経験・見識を習得した学生を世に送り出していくことが、大学の教育・研究の大きな使命です。

日常の人の生活や企業の生産活動で使われる「もの」や「サービス」は、「多くの基礎分野や応用分野の研究開発成果の中から目的に合う成果を組み合わせる」出来上がっています。今までに無いものだから、いいものだからという理由だけで使われるのではなく、利便性や心理的な理由で「使いたくなる」から使われるのです。

大阪大学の学生が世界の人々の役にたつ人材であるためには、専門を核として広い分野を視野に入れる人材として育てる必要があります。

そのためには、まず学部や大学院の基礎学問領域の教育研究の充実強化が必要であり、大阪大学においても学部や大学院の教育研究内容の変革が行われ多くの成果が出ています。

それに加えて、基礎学問領域を組み合わせ融合させた学際融合的な教育研究が強く求められています。

大阪大学では、以前から「ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構」、「臨床医工学融合研究教育センター」が、今年度からは「金融・保険教育研究センター」が、学際融合的な教育プログラムを開講しています。来年度開講に向けて、「サステナビリティ・サイエンス研究機構」が教育研究プログラムの企画を進めています。

教員や事務職員が、所属する学部や大学院での教育・研究に多くの力を注いでいる上に、さらに学際融合の教育研究を実施するのは、大変なことです。学際融合的であるがゆえに、プログラムを構成する授業科目やプログラム実施担当教員の所属が複数の研究科に跨り、プログラム運営が円滑に行なわれているとは必ずしも言えない状況があります。

かかる状況下で、学際融合教育研究プラットフォームは、平成18年4月に発足しました。《学際融合のセンターや機構の教育研究プログラム企画段階から教育研究実施段階に至るプロセスが、スムーズに進行するように支援する》のが、学際融合教育研究プラットフォームの役割です。

■ 学際融合教育研究プラットフォームの支援内容と組織

(1) 大阪大学学際融合教育研究プラットフォーム規程

平成18年4月1日に制定された規程で、以下のように定められています。

プラットフォームの目的

大阪大学における学際融合的な教育プログラム及び研究プロジェクト（以下「学際融合教育プログラム等」という）について、これらを実施する組織からの要請に基づき、運営上必要な具体的支援を行い、円滑な実施に資することを目的とする。

プラットフォームの業務内容

- a. 学際融合的な教育プログラム等の運営に係わる共通的事項の企画立案に関すること。

- b. 新たな学際融合教育プログラム等の企画立案、将来の運営への助言に関すること。
- c. 学際融合教育プログラム等の実施に伴う学務上の制度設計及び時間割等の全学的調整に関すること。
- d. その他、上記 に記載のプラットフォームの目的を達成するために必要な業務。

(2) 組織構成と運営体制

学際融合教育研究プラットフォームの組織構成と運営体制を、図1に示します。

組織構成と役割分担

a. 教員組織

プラットフォーム長：

久保司郎教授

- ・プラットフォームの業務を統括。

専任教員（1名）：

中西 浩教授

- ・プラットフォーム長の業務を補佐。
- ・学際融合教育プログラム等の制度・運営に関する共通的な項目の企画立案。
- ・新たな学際融合教育プログラム等の企画立案
- ・既存のプログラムの融合や総合の企画と運営に関するアドバイス。
- ・人材育成プログラムのコーディネート。

b. 事務組織

学生部にプラットフォーム事務室を設置。

室長（学務課長兼務）：

三井 衛学務課長

室員：勝木泰子専門職員、
山口淳志専門職員

- ・プラットフォームの管理・運営の事務に関すること（運営協議会の開催含む）。
- ・学際融合教育プログラム等の学務に係わる共通事項の支援。

○学生募集に関する支援

○履修案内（シラバス）作成に関する支援

○学務情報システムの運用に関する支援

○その他学務に関する事項の支援等

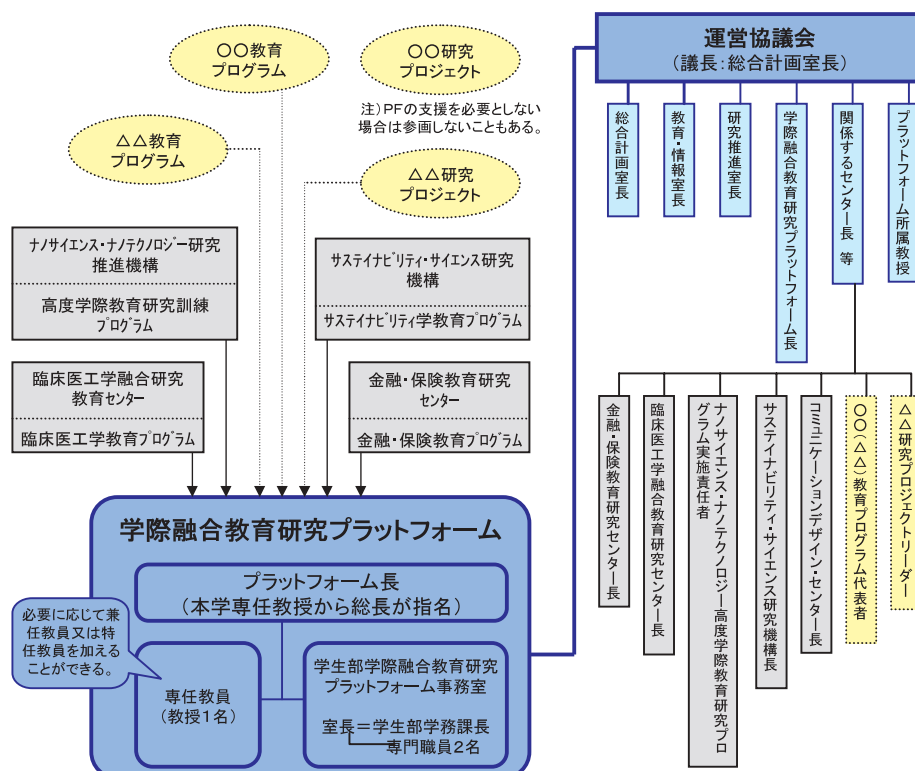
プラットフォーム運営協議会

議長：鈴木 直副学長

委員：総合計画室長、教育・情報室長、研究推進室長、プラットフォーム長、プラットフォーム運営協議会が支援すると認めた学際融合教育プログラム等の実施組織代表者およびプラットフォーム教授

- ・学際融合教育研究を企画実践するセンターからプラットフォームに出された支援要請に対するプラットフォームの対応を協議。
- ・支援を行うセンターに共通する課題の抽出と対応を協議。
- ・プラットフォームの在り方を協議。

図1 学際融合教育研究プラットフォーム



■ 学際融合教育研究プラットフォームの支援事例

現在の主な活動としては、金融・保険教育研究センターが平成18年10月から開講する社会人再教育プログラムについて、受講生募集から開講までに必要な学務関連の業務支援を行っています。

支援に当たっては、現在運営されているナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構や臨床医工学融合研究教育センターにおける設立から実践までの取り組みを参考に行っています。

以下、支援の主要な内容を示します。

(1) 金融・保険教育研究センター学際融合教育プログラムの支援

平成18年度から教育プログラムが実施されています。

隔週金曜日に開催されている実施専門委員会に陪席し、大学院生プログラム、及び10月からスタートする社会人教育プログラムの運営に関して、教務的事項の助言等を行なっています。

特に、10月からスタートする社会人教育プログラム（科目等履修生受入れ）に関しては、制度の変更を含めた支援となったので、以下に詳細に記載します。

【支援のポイント】

- ・複数研究科にまたがる科目から構成された金融・保険教育プログラムの社会人学生の受入れ方法の検討
- ・出願者の費用負担を軽減するための措置に関する支援
- ・募集要項の作成に関する支援
- ・学籍・成績管理などの教務に関する支援

受入れ方法

プログラム科目が複数研究科の科目で構成されているため、従来の科目等履修生の出願方法では研究科単位に出願手続きをしなければならず手続が煩雑になります。そこで、手続きを円滑に行うため、センターにおいて、募集・出願受付・入学候補者（履修科目）の選考を一括で行い、その結果に基づき各科目開設研究科で科目等履修生の受入れを承認してもらうようにしました。これにより、出願者の手続上の負担を軽減しました。

出願者の費用負担に関する軽減措置

金融・保険教育プログラムの科目等履修生は、複数研究科にまたがる科目を、複数年で受講し修了します。

○納付金（検定料・入学金）の取扱い

現状の科目等履修生に対する納付金の取り扱いを、プログラム履修生に適用すると、費用の負担が大きくなることが分りました。

【納付金（検定料・入学金）の取扱いの現状】

- 検定料は、履修科目開設研究科ごとに納付。（入学金は複数研究科に出願する場合でも一つの研究科のみに納付）
- 次年度も引続き履修する場合は、検定料・入学金とも改めて（各年度ごとに）納付。

そこで、学際融合教育プログラムを履修する科目等履修生に限り、aについては、履修科目の開設研究科が複数になる場合でも検定料は一回のみ納付、bについては、プログラムが定める履修期間内では年度ごとの納付が不要（当初納付の1回のみ）となるよう、教育・情報室会議の承認（教育課程委員会は報告事項）を得て制度を整えました。

学際融合教育プログラムにおける科目等履修生の納付金（検定料・入学金）の取扱いについては表1に示します。

募集要項記載事項の検討

募集要項自体はセンターで作成しますが、要項のうち主に事務手続部分及び出願書類について、教務面から見た検討課題を整理してセンターに案を提示し、検討しました。

主なものは、下記のとおりです。

- 出願資格、合否判定に関する事項
- 授業科目の開示に関する事項
- プログラム修了認定に関する事項

学籍・履修・成績管理等

学籍・履修・成績管理については、主に学務情報システムを利用していくことになります。科目等履修生を受入れる2学期からは、学務情報システムが新しいシステム（KOAN）となり、資格判定機能というこれまでになかった新機能が増え学際融合教育プログラム（の修了認定）で利用できる可能性ができました。

KOANをどのように有効的に運用していけばよいかプラットフォームで検討し、センターに提示していく予定です。

表1 学際融合教育プログラム科目等履修生の費用（検定料・入学金）措置

	従来の科目等履修生	学際融合教育プログラム科目等履修生
	各研究科の出願要項に基づく出願。	学際融合教育プログラムの募集要項に基づく出願。同プログラムの修了認定を受けることが目的。
所属研究科	出願先の研究科。	履修科目（学際融合教育プログラム構成科目）の開設研究科。同一人物が複数研究科に所属。
検定料	出願先（の研究科）ごとに徴収。	履修科目の開設研究科（所属研究科）の数に関わらず1回の徴収。
入学金	履修科目の開設研究科（所属研究科）の数に関わらず1回の徴収。	履修科目の開設研究科（所属研究科）の数に関わらず1回の徴収。
次年度も引続き履修する場合の検定料・入学金の取扱い	検定料・入学金とも改めて徴収。	学際融合教育プログラムが定める履修期間内では不徴収。

センターに対する今後の支援について

プラットフォームは、プログラム全体を見据えたうえで、履修者の学籍・履修・成績等に係る学務情報システムの操作・管理のフォローを行うことに加え、センターからの依頼に応じて下記支援を継続して行います。

ａ．金融・保険教育研究センターからの支援依頼への対応。

ｂ．同センターの実施専門委員会への必要に応じた陪席を通し、教育プログラムの実施状況・問題点の把握と対応。

(2) ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構支援

平成16年度から教育プログラムが実施されています。

新しい学務情報システム(KOAN)について、どのように運用すればナノ機構プログラムを含む学際融合教育プログラムの運営に役立つかを検討しています。

(3) 臨床医工学融合研究教育センター支援

平成17年度から教育プログラムが実施されており、平成18年度は、臨床医工学・情報学スキルアップ講座が開講されています。プラットフォームとして今後どのような支援が可能か、意見交換を進めて詰めていく予定です。

(4) サステナビリティサイエンス学連携研究機構支援

平成19年後期からの教育プログラム開講に向け、企画が進められています。どのような支援が必要か、サステナビリティ運営委員会に陪席しながら把握していく予定です。

(5) コミュニケーションデザイン・センター支援

プラットフォームとしてどのような支援が可能か、意見交換をし、検討していきます。

■ 学際融合教育研究プラットフォームの今後の進め方

発足して4ヶ月、学際融合教育プログラム等の実施に向けての具体的支援を進めて成果が出つつあります。

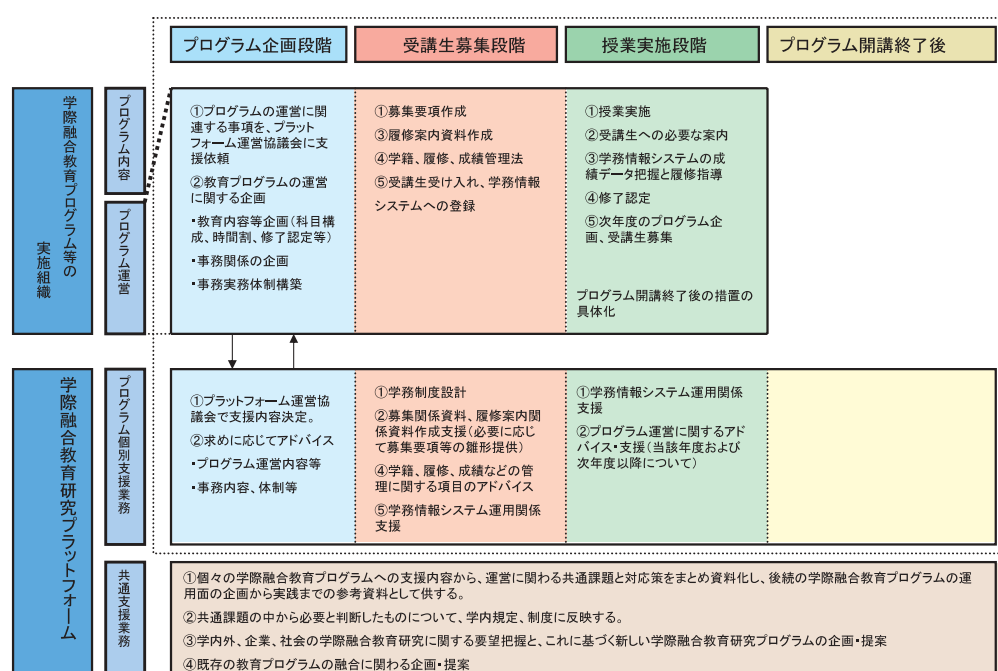
今後の進め方については、2章で述べたプラットフォームの目的と業務のガイドラインに沿って、図2に示すような内容で、具体的に着実に支援を実行していくことだと考えています。

学際融合教育研究プログラムの企画や実践に携わる組織や教職員の方々に、頼りにされ喜ばれるプラットフォームになりたいと思っています。

下記の取組みをします。

- (1) 現在教育プログラムを実施しているプログラム実施組織への継続支援
- (2) 開講を目指して企画を進めているプログラム実施組織への支援
- (3) プログラム実施組織の学務など事務面での複雑な業務の指導支援
- (4) 学際融合教育プログラムの企画から実践に至るまでのプロセスでの共通的検討項目を洗い出し・フロー図化
- (5) プログラム実施組織の教育研究プログラムの終了後の措置方法の検討
- (6) 学内および学外の企業や社会人の学際融合教育研究に対するニーズ調査
- (7) 新たな学際融合教育研究の企画提案

図2 学際融合教育研究プラットフォームの業務内容



役員室だより

2006.8 Vol.13

平成19年度新規概算要求については、1月の総長・理事による各部局ヒアリングの後、各部局等からの要求事項について精査・精選した上、6月下旬に文部科学省に要求書を提出、7月6日にヒアリングの説明を終えました。

今年は以下のとおり特別教育研究経費関係で32件（継続18件、新規14件）、病院特別医療機械設備関係で4件、施設整備費関係で24件（継続3件、新規21件）の要求となりました。

また、評価・広報室のところで(15ページ)で記載されているように平成17年度業務実績報告書についても同省への提出とヒアリングを終えました。概算要求書及び業務実績報告書の作成等に携わられた関係者の皆様方には、大変ご苦勞様でした。

中・長期を見据えた大阪大学の計画とその着実な実行に向けて、役員一同が努力することは当然のことですが、本学構成員皆様のご尽力とご協力をこれからもよろしくお願いいたします。

平成19年度新規概算要求事項（大阪大学→文部科学省）

区 分	事 項	備 考
【特別教育研究経費】		
○教育改革経費		
薬 学 研 究 科	高度専門薬学教育システムの確立(5-2)	継続事業
コミュニケーションデザイン・センター	コミュニケーションデザイン教育事業の推進(5-3)	継続事業
臨床医工学融合研究教育センター	臨床医工学・情報科学融合領域の人材育成教育プログラムの開発(5-2)	継続事業（増額要望）
理 学 研 究 科	計算機マテリアルデザイン力育成とグローバルリサーチトレーニングネットワーク(RTN)形成事業	
医 学 部 附 属 病 院	E3BMユニットによるClinical Research Professionalsの人材養成プロジェクトの設立	
サイバーメディアセンター	高度外国語教育全国配信システムの構築	外大統合関連要求事項
教 育 ・ 情 報 室	国際協力・共生社会のための実践的教育改革事業—グローバルコラボレーションセンター—	外大統合関連要求事項
○研究推進経費		
微 生 物 病 研 究 所	感染症対策研究連携事業(感染症国際研究センター)(10-3)	継続事業
蛋 白 質 研 究 所	生命の秩序化を担う膜蛋白質の構造・機能メカニズムの解明を目指す国際フロンティア(膜蛋白質研究国際フロンティア)(5-3)	継続事業
社 会 経 済 研 究 所	中国香港科学技術大学実験ビジネス研究センターとの連携による経済実験プロジェクト(5-3)	継続事業
接 合 科 学 研 究 所	全国共同利用附置研究所連携事業(金属ガラス・無機材料接合技術開発拠点)(5-3)	継続事業
超 高 圧 電 子 顕 微 鏡 セ ン タ ー	超高圧電子顕微鏡を中核とする新しい病理診断法の研究創出事業(5-3)	継続事業
レーザーエネルギー学研究センター	相対論光科学研究創出事業(5-3)	継続事業
ラジオアイソトープ総合センター	全学放射線取扱者研究推進支援事業(5-3)	継続事業
極 限 量 子 科 学 研 究 セ ン タ ー	極限ナノ物性研究創出事業(5-3)	継続事業
産 業 科 学 研 究 所	附置研究所間連携事業(新産業創造物質基盤技術研究センターによる中核的研究拠点間アライアンス実現に向けたポストシリコンの戦略的研究)(5-3)	継続事業（増額要望）
レーザーエネルギー学研究センター	高出カレーザーによる高エネルギー密度状態の科学の開拓(5-2)	継続事業（増額要望）
医 学 部 附 属 病 院	テラーメード型再生医療の創成—難治性三大疾病克服にむけたトランスレーショナルリサーチの実践—	
社 会 経 済 研 究 所	行動経済実験による国際比較研究プロジェクト	
○拠点形成経費		
核 物 理 研 究 セ ン タ ー	偏極標的を用いたハドロン物質研究推進事業(5-3)	継続事業
理 学 研 究 科	荷電レプトン混合現象探求のための大強度高輝度高純度ミューオンビーム源研究拠点形成事業	
接 合 科 学 研 究 所	高度溶融溶接技術連携研究拠点形成	
核 物 理 研 究 セ ン タ ー	大強度高エネルギーレーザー電子光ビームによるクォーク核物理の新展開	
○連携融合事業経費		
理 学 研 究 科	超分子におけるストレスと共生(5-2)	継続事業〔教育関連〕
医 学 系 研 究 科	「子どものこころの発達研究センター」による教育研究事業(4-2)	継続事業〔教育関連〕
金 融 ・ 保 険 教 育 研 究 セ ン タ ー	新領域分野「金融・保険科学」に関する文理融合型教育プログラムの開発—金融・保険教育研究センター教育事業—(5-2)	継続事業〔教育関連〕
工 学 研 究 科	アトミックテクノロジー創出事業(4-2)	継続事業〔研究関連〕 (増額要望)
医 学 系 研 究 科	システム糖鎖医学生物学センターによる教育研究事業	〔教育関連〕
基 礎 工 学 研 究 科	量子機能融合による未来型材料創出事業—スピントロニクス、オプトロニクス、モレクトロニクス融合による未来型機能材料創出事業—	〔研究関連〕
附 属 図 書 館	「高齢化社会と医療」に関する情報提供体制のモデル構築事業	〔研究関連〕

区 分	事 項	備 考
○特別支援事業経費		
サイバーメディアセンター	大阪外国語大学統合による高速・高セキュリティ基幹ネットワークの構築	外大統合関連要求事項
医学部附属病院	手術室・安全・管理システム	
【病院特別医療機械設備（長期借入金対象）】		
医学部附属病院	高速デジタル画像診断システム	
医学部附属病院	手術支援システム	
医学部附属病院	ガンマカメラ検査システム	
歯学部附属病院	デンタルチェアユニット	
【施設整備費】		
○人材養成機能を重視した基盤的施設の整備		
学 生 部	（石橋）学生交流棟整備等事業	PF1事業（13-3）
工 学 研 究 科	（吹田 1）研究棟改修（工学部）整備等事業	PF1事業（13-2）
理 学 研 究 科	（理）研究棟改修	（3-3） \$45年以前 耐震補強
歯 学 研 究 科	（歯）歯学部本館改修	新営建物完成後に整備
事 務 局	（石橋）体育館改修	\$45年以前 耐震補強
附 属 図 書 館	（図書）吹田分館改修	\$45年以前 耐震補強
工 学 研 究 科	（吹田 1）アライアンス棟	原子・分子イオン制御理工学センター（H17設置）との合築
法 学 研 究 科	（石橋）文法経本館改修	（3-1） \$45年以前 耐震補強
総 合 計 画 室	（吹田）基幹・環境整備	受水槽・給水管設備
総 合 計 画 室	（石橋）文理融合型総合研究棟	
総 合 計 画 室	（石橋）基幹・環境整備	電気室
医 学 部 医 学 科	（医）総合研究棟	
医 学 部 保 健 学 科	（薬・保健）ヘルスケア科学総合研究棟	合築整備
薬 学 部	（薬・保健）ヘルスケア科学総合研究棟	
国 際 交 流 推 進 本 部	（石橋）国際交流会館	
総 合 学 術 博 物 館	（石橋）総合学術博物館	
○卓越した研究拠点の整備		
情 報 科 学 研 究 科	（吹田 2）情報系先端融合科学研究棟	
産 業 科 学 研 究 所	（産研）研究棟改修	（3-1） \$45年以前 耐震補強
微 生 物 病 研 究 所	（吹田 1）融合型生命科学総合研究棟	合築整備
蛋 白 質 研 究 所	（吹田 1）融合型生命科学総合研究棟	
総 合 計 画 室	（吹田 1）融合型生命科学総合研究棟	
微 生 物 病 研 究 所	（微研）本館等改修	\$45年以前 耐震補強
○先端医療に対応した大学附属病院の整備		
歯 学 部 附 属 病 院	（歯病）附属病院本館改修	新営建物完成後に整備
医 学 部 附 属 病 院	基幹・環境整備として年次計画	ナースコール設備更新
		電話交換機設備更新
		コ・ジェネレーション設備点検整備
		外来外壁漏水改修
		中型搬送設備整備
		空調用冷却水ポンプ等整備
		ファンコイルユニット整備
		コ・ジェネレーション設備発電機整備
		誘導灯設備更新

各室の検討状況

総合計画室

新たな教員組織の在り方についての検討

「教員組織等の在り方に関する検討ワーキング」では、9月又は10月中には検討結果をまとめる予定としています。まだ確定されたものではありませんが、現段階における主な事項に関する検討の方向としては、次のように進められています。

〔検討の骨子〕

- 1 教員の職について
 - 本学における教員の職は、教授、准教授、講師、助教、助手とする。
 - * 講師は、部局の必要に応じて置くことができる職として残す。
 - * 助手については、平成19年4月以降は新規に採用しない。ただし、現助手のうち引き続き助手として残る者もいるため、当分の間、助手の職は残す。
- 2 現在の職から新職への移行について
 - 現職の助教授は、すべて准教授に移行させる。
 - 現職の助手は、部局の判断により助教と助手に振り分ける。
 - * 振り分けは、個々の職務の実態等を勘案し部局として統一した判断の下、行う。
- 3 講座、学科目等の教員組織について
 - このたびの法令改正においては講座、学科目制を維持することを否定していないが、現状と別の形態の教員組織への変更を必要とする部局がある場合は、その変更計画案を聞いた上で検討ワーキングと総合計画室において個々に検討していく予定とする。

文書館設置準備室の設置

4月号の役員室だよりで、次期中期計画が始まる平成22年度に文書館を開設することを目指して、今年度中に文書館設置準備室を設置することについてお知らせしましたが、7月1日付けで同準備室が設置されました。場所は、基礎工学部の前の「サイバーメディアセンター・豊中教育実習棟」内で、3階の教員室（2室）を借用させていただきスタートすることになりました。

文書館設置準備室の設置目的と業務内容については、下記の設置要項に書かれているとおりです。

なお、初代室長については、総長指名により経済学研究科の阿部武司教授が就任されました。また、専任の講師については、10月1日からの採用予定で現在選考中です。

この準備室では、今後、「阪大100年史」に向けての編纂準備などのため、事務局及び各部局保存の法人文書や研究室等で保存されている本学の歴史に関する貴重文書などについて、調査・収集などの活動を開始していくこととなりますので、各部局等のご協力をよろしくお願いします。

大阪大学文書館設置準備室設置要項

（設置）

- 第1 大阪大学に、大阪大学の歴史に関する文書（法人文書を含む。以下同じ。）の収集、整理、保存及び公開を目的とする文書館の設置準備を行うため、大阪大学文書館設置準備室（以下「準備室」という。）を置く。

（業務）

- 第2 準備室は、次の各号に掲げる業務を行う。
- 一 大阪大学の歴史に関する文書の収集、整理及び保存に関すること。
 - 二 大阪大学の歴史に関する文書の調査に関すること。
 - 三 その他文書館の設置準備に必要な事項

（室長）

- 第3 準備室に、室長を置く。
- 2 室長は、本学の教員のうちから総長が指名する者をもって充てる。
 - 3 室長は、準備室の業務を統括する。
 - 4 室長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（専任教員等）

- 第4 準備室に専任教員として講師1人を置く。
- 2 専任教員は、室長の命に従い、準備室の業務に従事する。
 - 3 第1項に定めるもののほか、準備室に、必要な職員を置くことができる。

（事務）

- 第5 準備室に関する事務は、事務局関係部課及び関係部局事務部の協力を得て、総務部企画推進課で行う。

（雑則）

- 第6 この要項に定めるもののほか、準備室に関し必要な事項は、総長が別に定める。

附 則

この要項は、平成18年7月1日から施行する。

省エネルギー活動の推進

施設マネジメント委員会においては、各部局の電力使用量の把握・分析を行うとともに、昨年度に引き続き、使用者の省エネルギー意識の向上を図るためポスター（別紙１）を作成、配布して省エネ意識の啓発に努めています。

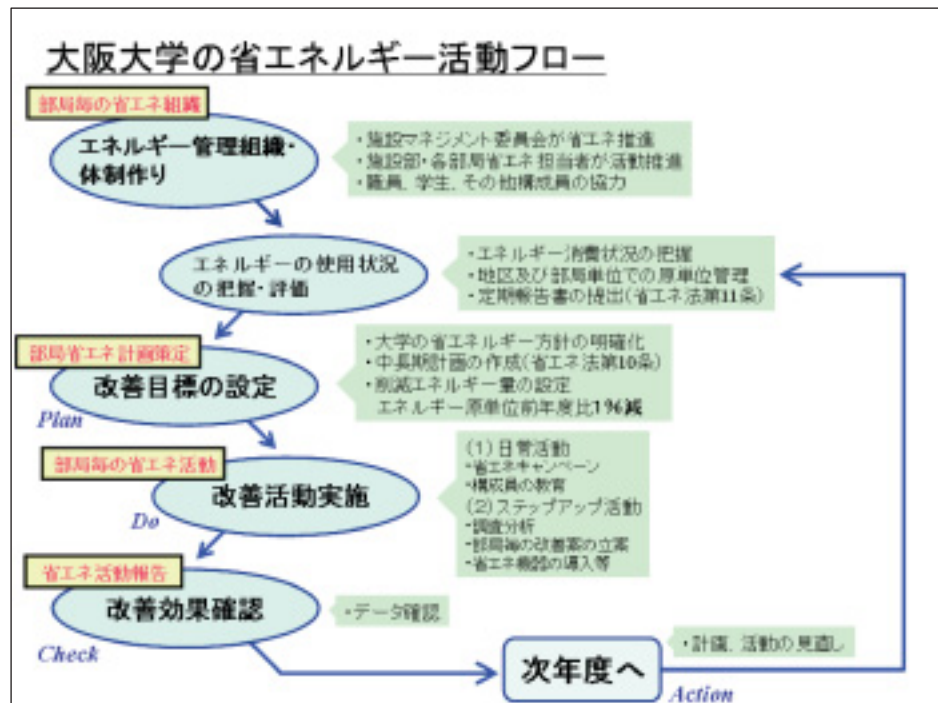
今年度は、「省エネルギー活動フロー」（別紙２）に基づいた組織的な省エネ活動を展開しており、各部局においては自主的な省エネ推進組織の設置、省エネ計画の策定及び施設マネジメント委員会への報告等ご理解とご協力をいただいているところです。

また、今年度は省エネ対策の一つとして12の部局で夏季一斉休業を実施する予定ともなっています。

（別紙１）



（別紙２）



教育・情報室

本学学生による強要事件、母親殺害事件への対応

本年に入ってから本学学生による、北新地におけるホストクラブ関係の「強要」事件、豊中市における母親殺害事件など、「人」として絶対にしてはならない凶悪な事件が続いております。ともに大学外で起こった事件とはいえ、高度な知性と豊かな感受性をもった人材を送りだすべくさまざまな教育プログラムに取り組んできた大阪大学としては、残念遺憾である以上に、わたしたちの教育に不十分な点はなかったか、「教育」の名によって大学として何をどこまでなすのかを厳しく顧みざるをえないものでありました。

現在、大学は専門知識・技能の教育のみならず、教養、感受性、コミュニケーション能力などの涵養のためにも多くのプログラムに取り組んできておりますが、これらは講義や演習、懇談会、諸事務手続きなど、日々学生と接触する場でこそきめこまかに組み込まねばならないものであり、その意味でそれらプログラムの足元、つまりは教育現場のあり方の見なおしを、教職員の方々には強くお願いしたいと思います。

このような事件が続き、学生諸君のなかにも動揺が広がりつつあるなか、7月10日、教育担当副学長による学生諸君への緊急メッセージとして、「公告」を全学に掲示し、あわせて同文を大阪大学ホームページに掲載いたしました。

「公告」は、55ページをご覧ください。

競争的教育プログラムの採択

■「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

平成18年度の「魅力ある大学院教育」イニシアティブには本学からは7研究科から13件申請し、うち8件に関して6月にヒアリングが実施されました。その結果、以下の3つの申請課題が採択されました。

・「国際公益セクターの政策エキスパート養成」

(国際公共政策研究科国際公共政策専攻、取組担当者・村上正直教授)

・「生命先端工学国際創造教育プログラム」

(工学研究科生命先端工学専攻、福住俊一教授)

・「先端通信エキスパート養成プログラム」

(工学研究科電気電子情報工学専攻、河崎善一郎教授)

本学は全国最高の3件が採択され、昨年度と合わせた計13件の採択件数は全国最多となりました。

■現代的教育ニーズ取組支援プログラム

平成18年度の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(いわゆる現代GP)は、「テーマ2：地域活性化への貢献(広域型)」部門で、本学からは以下の1申請課題が採択されました。

・「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築——地域と連携した専門職育成教育プログラム」

(医学系研究科保健学専攻、事業推進者・永井利三郎教授)

主専攻・副専攻のあり方の検討

7月の教育課程委員会におきまして、本学における「主専攻・副専攻」のあり方を検討すべく、「主専攻・副専攻のあり方に関するWG」を発足させ、より踏み込んだ検討に入りました。全国の大学における実施ならびに検討状況につきましては、文部科学省先導的大学改革推進委託事業「大学院におけるメジャー・マイナー、ジョイントディグリー等に関する調査研究」報告書(東京工業大学)が公開されましたので、各部局においてもご参照ください。

(新)大阪大学の平成20年度大学入学者選抜等に係る説明会の実施

8月2日に、「(新)大阪大学の平成20年度大学入学者選抜等に係る説明会」を本学コンベンションセンターにおいて実施いたしました。大阪大学は大阪外国語大学と統合後、平成20年4月から新学生を迎えることとなりますが、そのための入試実施概要の説明を、両大学に多くの受験生・学生を送りだしておられる近畿・中国・四国各地方の高等学校の進路指導の先生方に対して実施いたしました。当日は、52校、60名のご出席をいただき、「統合」の内容、ならびに統合後の大阪大学のあり方への熱心な質問が続きました。

研究推進室

部局横断型の研究プロジェクト支援経費によるシンポジウム等

研究推進室が間接経費として配分を受けた部局横断型の研究プロジェクト支援経費による各研究戦略ワーキンググループのシンポジウム等及び主たる世話人が下記のように決定しました。

研究戦略ワーキング名	シンポジウム等名称	主たる世話人
ナノサイエンス・ナノテクノロジー	第2回大阪大学ナノサイエンス・ナノテクノロジー国際シンポジウム (平成18年11月21日～22日開催予定)	工学研究科 森田 清三 教授
生命科学・生命工学	第2回「21世紀を拓くフロンティア産業バイオ」シンポジウム (開催日：未定)	工学研究科 原島 俊 教授
	知と行動シンポジウム (開催日：未定)	生命機能研究科 藤田 一郎 教授
	第2回大阪大学臨床医工学融合研究教育センターシンポジウム (平成18年10月8日～9日開催予定)	臨床医工学融合研究教育センター 倉智 嘉久 教授
理工学	第2回「アクア」シンポジウム (平成18年12月頃開催予定)	基礎工学研究科 大垣 一成 教授
	第2回「非線形テクノサイエンス」研究会 (平成19年3月頃開催予定)	基礎工学研究科 杉本 信正 教授
	先端技術デザインセンターサブワーキンググループ第2回シンポジウム (平成18年11月頃開催予定)	工学研究科 谷口 研二 教授
	基礎科学研究戦略サブワーキンググループシンポジウム (開催日：未定)	理学研究科 高原 文郎 教授
文系	ワークショップ「東アジア地域統合の歴史と現状」 (平成18年10月7日開催予定)	文学研究科 秋田 茂 教授
	人間の安全保障ー第2回ワークショップ (開催日：未定)	人間科学研究科 栗本 英世 教授
文理融合	ワークショップ 「文理融合研究の展望 第2回」 (平成18年11月頃開催予定)	人間科学研究科 小泉 潤二 教授

(財)井上科学振興財団及び(財)千里ライフサイエンス振興財団受賞候補者の学内選考

井上科学振興財団の第23回井上研究奨励賞に対して学内関係部局から推薦のあった19名の中から、研究推進室において、当該財団からの推薦枠18名に対する学内選考を行いました。

本学の推薦内訳は次のとおりです。

理学研究科(4件)	薬学研究科(1件)	微生物病研究所(2件)
医学系研究科(2件)	工学研究科(2件)	産業科学研究所(2件)
歯学研究科(1件)	基礎工学研究科(3件)	核物理研究センター(1件)

また、千里ライフサイエンス振興財団の平成18年度奨励研究助成に対して学内関係部局から推薦のあった2名の中から、研究推進室で編成したワーキングメンバーにより、当該財団からの推薦枠1名に対する学内選考を行いました。

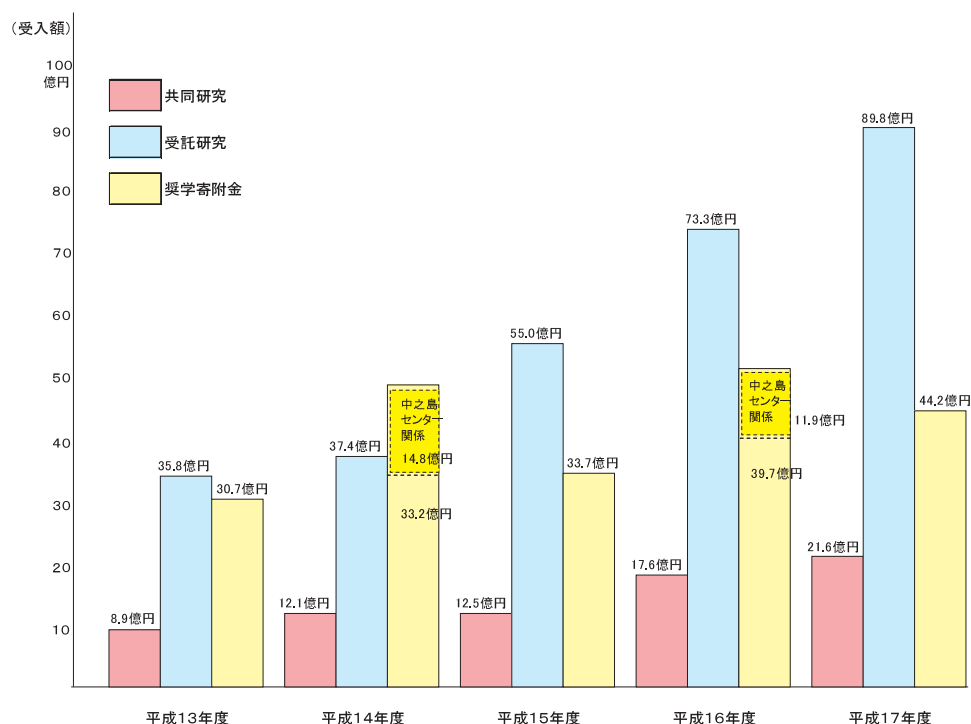
本学の推薦内訳は次のとおりです。

理学研究科(1件)

外部資金の動向

本学における外部資金の受入額、受入件数は、年々かなりの比率で増加しています。過去5年間の本学の外部資金の動向（科学研究費補助金を除く。）及び平成17年度の共同研究・受託研究受入額の上位10校については以下のとおりです。

過去5カ年の外部資金（科学研究費補助金を除く。）の動向



共同研究・受託研究受入額(金額順)上位10校

(単位:千円)

順位	機関名	全体金額
1	東京大学	26,558,391
2	京都大学	11,532,691
3	大阪大学	11,144,091
4	東北大学	9,184,880
5	九州大学	6,136,352
6	早稲田大学	5,558,027
7	北海道大学	5,529,466
8	慶應義塾大学	5,489,822
9	東京工業大学	5,153,086
10	名古屋大学	3,496,171

共同研究受入額(金額順)上位10校

(単位:千円)

順位	機関名	件数	全体金額	うち 民間企業金額
1	東京大学	850	4,105,744	3,014,064
2	京都大学	504	2,250,484	1,723,869
3	大阪大学	586	2,163,276	1,616,812
4	東北大学	479	1,826,814	1,255,810
5	東京工業大学	423	1,309,985	1,045,629
6	九州大学	388	1,238,338	869,681
7	慶應義塾大学	212	1,218,002	1,006,264
8	山口大学	223	883,634	824,683
9	北海道大学	347	763,190	594,343
10	東京農工大学	245	725,741	664,924

評価・広報室

1 7 年度業務実績報告書の公表

6月末に、平成17年度業務実績報告書を文部科学省国立大学法人評価委員会に提出し、8月2日には同委員会評価チームによるヒアリングが実施されました。評価結果（案）が8月下旬にまとめられ、大学への意見照会（意見申立の機会）を経て、9月下旬に評価結果が公表される予定です。

同報告書についてはホームページに掲載しています。また、同報告書における大学全体の自己評価は次のとおりです。

項 目	年度 計画数	進行状況(自己評価)			
		IV	III	II	I
II 業務運営の改善及び効率化に関する目標	47	3	44	0	
1 運営体制の改善に関する目標 No.164)～178)	15	0	15	0	
2 教育研究組織の見直しに関する目標 No.179)～184)	6	0	6	0	
3 人事の適正化に関する目標 No.185)～204)	20	3	17	0	
4 事務等の効率化・合理化に関する目標 No.205)～210)	6	0	6	0	
III 財務内容の改善	16	7	9	0	
1 外部資金その他の自己収入の増加に関する目標 No.211)～219)	9	5	4	0	
2 経費の抑制に関する目標 No.220)～223)	4	1	3	0	
3 資金の運用管理の改善に関する目標 No.224)～226)	3	1	2	0	
IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供	12	3	9	0	
1 評価の充実に関する目標 No.227)～234)	8	2	6	0	
2 情報公開等の推進に関する目標 No.235)～238)	4	1	3	0	
V その他業務運営に関する重要目標	31	5	26	0	
1 施設設備の整備等に関する目標 No.239)～258)	19	2	17	0	
2 安全・衛生管理に関する目標 No.259)～270)	12	3	9	0	
合 計	106	18	88	0	
自己評価 IV 年度計画を上回って実施している III 年度計画を順調に実施している II 年度計画を十分に実施できていない I 年度計画を実施していない					



[http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/gyoumu_jisseki/gyoumu-jisseki\(h17\).pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/gyoumu_jisseki/gyoumu-jisseki(h17).pdf)

法科大学院認証評価(予備評価)の実施

6月末に、法科大学院認証評価(予備評価)自己報告書を大学評価・学位授与機構(認証評価機関)に提出しました。12月には訪問調査を受け、評価結果(案)が1月下旬～2月にまとめられ、大学への意見照会(意見申立の機会)を経て、3月に評価結果が確定する予定です。

在阪報道各社と大阪大学との懇談会開催

7月11日(火)に在阪報道各社との懇談会を中之島センターで開催しました。これは本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的として毎年開催されているものです。

(詳細は、34ページ参照。)

大阪大学プロフィール2006の発行



7月下旬に、大阪大学プロフィール2006を発行しました。

今回は、表紙のデザイン、内容を全面的にリニューアルし、より見やすくしました。

プロフィール2006は、ホームページに掲載しています。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/profile2006.pdf>

財務・会計室

平成17年度決算

法人化後2年目となる平成17年度の決算を行い、6月に文部科学省へ財務諸表を提出しました。提出した財務諸表は、国立大学法人評価委員会の意見を聴いたうえで、文部科学大臣が承認を行うこととされており、本学の財務諸表についてはその承認を受けた後、公表する予定です。

短期資金の運用

余剰資金の運用については資金運用ワーキング・グループで検討を行い、長期運用においては平成16年度から40億円の運用を開始し、平成17年度からは更に30億円を追加して総額70億円の運用を国債等の購入により行ってきました。今年度からは更に効率的な資金運用を図るため、短期資金運用も開始しました。

平成18年度予算配分基本方針の一部改正

平成18年度の新規大学留保ポストに対する予算配分を行うにあたり、その職務内容が多様化してきたこと等を背景に予算配分方法の見直しを図るべく総合計画室とも議論を重ね検討してきました。その結果、職種に関わらず原則として助手と同単価とすること等の配分方針を決定し、平成18年度予算配分基本方針を一部改正しました。

人事労務室

民間企業等からの在籍出向者の受け入れ

民間企業等の研究者が民間企業等に在籍したまま、本学の教職員（常勤教員及びフルタイムの非常勤職員）として教育・研究に従事できるよう、在籍出向者受け入れ制度を創設しました（外部資金を活用しての雇用を想定）。今後、この制度を活用する場合、出向元と本学の間で在籍出向契約を締結することとなります。

なお、本制度については、今後、「官民人事交流法」の改正法が施行されるため、その内容もふまえながら、見直しを図ることとしています。

【平成18年7月24日施行】

国際機関等への派遣の取扱い

本学教職員の国際機関等への派遣については、法人化前、「国際機関等に派遣される一般職の国家公務員の処遇等に関する法律」等に基づいて行われてきましたが、法人化後は、休職として取り扱われていました。

しかし、こうした法律等の理念に基づき国際協力等の目的で国際機関、外国政府の機関等の業務に従事することは、法人化前と変わらず大学の重要な役割と考えられることから、今回、退職手当の勤続期間の通算、災害補償等について、派遣と同様の処遇とすることとしました。

【平成18年7月24日施行】

非常勤職員の夏季休暇

本学では、非常勤職員に夏季休暇を付与することについて、法人化の平成16年度から2年間、試行的に実施しました。

この試行の状況を踏まえ、平成18年度から非常勤職員が一定の条件で正式に夏季休暇を取得できることとしました。

【平成18年7月1日施行】

夏季一斉休業

夏季一斉休業により、教職員の心身のリフレッシュを図るとともに、併せて光熱水量費等の削減（電力消費量の最大ピークカットの効果を含む。）を図る等の観点から、同休業が実施できるよう特別休暇（夏季休暇）を最大3日までこれを充てることができるなどの制度化を図りました。

なお、同休業の実施の有無等は、当面、各部局の判断によることとし、実施する場合は、当該部局において、より一層の年次有給休暇の取得促進を図ることとしました。

【平成18年7月1日施行】

改正高年齢者雇用安定法への対応

改正高年齢者雇用安定法により、段階的に65歳までの雇用機会の提供することが義務化され、その方法として、定年年齢の延長、継続雇用制度の導入、定年制廃止の3種があり、本学では、継続雇用制度の導入（再雇用制度）案で検討しています。

なお、その具体的な案を検討するにあたり、平成18年度定年退職者（60歳定年該当者）から対象となるため、当面60歳定年退職者について、制度設計することとし、その考え方の案を作成し、規程等の案を作成中です。

また、これに併せて、任期付職員（非常勤職員を含む。）についても検討しています。

【平成18年度中に実施する方向で検討中】

事務系職員の評価制度

勤務成績を昇給及び賞与（業績手当）により反映すること、及び運営費交付金等の削減が予想されている中で、人的資源を最大限活用していくことが必要であり、そのための人材育成は不可欠であることから、新たな評価制度を検討しています。

なお、新たな評価制度の考え方としては、現行の勤務評定制度の見直しを図り、かつ、人事院の新人事評価制度に依拠を基本姿勢としつつ、地方公共団体や民間の勤務評価制度の例などを参考に本学に適した内容に改める予定です。

【平成18年10月に実施する方向で検討中】

国際交流推進本部

阪大生の海外留学の推進

いま世界は、学生が国境を越えて学ぶ時代になっています。大阪大学では、このような流れを受けて、阪大生の海外留学を強く推進しています。そのため、前号の「役員室だより」で詳しく報告しましたように、大阪大学独自の海外留学支援制度を作りました。一人でも多くの皆さんが、機会を失することなく応募して、海外留学することを望みます。これについて質問のある方は、研究推進・国際部学生交流推進課留学交流推進係（内線 4026）にお問い合わせ下さい。この海外留学支援制度の実施の状況を、以下に報告します。

（１）学生海外短期研究留学助成

これは、2 か月から 10 か月程度、研究留学しようとする大学院博士後期課程（医・歯にあっては博士課程）の学生に対して、1 人当たり 100 万円を限度として支給するものです。年間 20 名程度を予定しています。その第 1 回として、本年 9 月までに留学を開始する 9 名が選ばれました。7 月 3 日（月）には宮原秀夫総長出席の下に「学生海外短期研究留学助成」授与式が行われました。（詳細は 33 ページ参照。）

なお、本年 10 月以降に留学を開始する学生については現在選考中ですが、場合によっては若干名の追加募集が予想されますので、その際は積極的に応募してください。

（２）学生海外研修プログラム等助成

これは、全学または部局が行う海外研修プログラムに参加する学生および大学院生を対象として、10 万円を上限として支給するもので、年間 70 名程度を予定しています。応募を開始したところ、皆さんの関心が非常に高く 144 名の応募がありました。厳正な選考の結果、111 名に支給することになりました。

（３）学生海外研修助成

これは、海外の大学間協定大学などへ出かけて交流する計画を持つ学生グループを対象に、1 グループ 100 万円を上限として、年間 2 グループに支給するものです。今年度は 7 グループの応募があり、選考の結果、2 グループが選ばれました。選ばれたグループのテーマは、それぞれ「Zero Waste に学ぶ」と「日米でみる研究とビジネスの関わり」です。帰国後、成果の発表会を予定しています。

（４）阪大生のための海外留学オリエンテーション

阪大生の海外留学が増えるためには、海外留学とはどんなものであるかを知ってもらう必要があります。そのため、毎年、留学生センターと学生交流推進課が「阪大生のための海外留学オリエンテーション」を行ってきました。今年は 6 月 19 日（月）、20 日（火）の昼休みと夕方、豊中キャンパスと吹田キャンパスで、合計 4 回実施しました。両日あわせて 166 名の学生が出席しました。大阪大学交換留学制度の説明のほか、交換留学を終えて帰国したばかりの学生に留学体験談を話してもらいました。そのあとの情報交換会にも大勢の学生が残り、個別相談をしていました。今後こうした説明会を増やしていくつもりです。



「海外留学オリエンテーション」には多数の学生が参加しました。

留学生支援基金の創設

他国に留学していると、思わぬ問題が起こることがあります。このことは外国から日本に留学してくる学生でも、海外に留学する阪大生でも同じです。そうした不測の事態に陥った場合を支援する制度として、「大阪大学留学生支援基金」を作り、この8月1日からスタートしました。この支援基金は次の3つの柱から成っています。

(1) 大阪大学留学生賃貸住宅連帯保証制度の保証人への補填金

留学生が部屋を賃貸するとき、しばしば連帯保証人を求められます。従来は、留学生のうち学部学生と大学院学生に限って、大阪大学の研究推進・国際部長が連帯保証人になっていましたが、その範囲を特別研究生、特別聴講生および研究生に広がります。

(2) 見舞金等

留学生や海外に留学中の阪大生に事故・病気など不測の事態が起こったとき、それに対する経費を支援するものです。適用範囲、金額、手続き等は、各部局に配付しています「大阪大学留学生支援基金見舞金等支給要項」をご覧ください。

(3) 一時貸付金

留学生や同居している配偶者・子供に、災害、疾病、怪我などの不測の事態が起こり、臨時的経費が発生して留学継続が困難になったとき、一時的に貸付を行うものです。これも、適用範囲、金額、手続き等は、各部局に配付しています「大阪大学留学生支援基金一時貸付金貸与要項」をご覧ください。

国際交流に関する現状分析報告

昨年度、大阪大学は、文部科学省の「大学国際戦略本部強化事業」に応募し、採択されました。その一環として大阪大学の国際交流の戦略性を高めるため、国際企画室を作りました。国際企画室は、国際交流に関する調査・企画・立案を行い、国際交流推進本部をサポートします。

昨年度は「世界の中の大阪大学」をテーマに、学内外の国際交流に関する現状をまとめました。

これには、

(1) 高等教育のグローバル化と世界の大学国際化の動向

(2) 大阪大学の国際交流の現状

が書かれています。(2)の中には、学術論文調査から見た国際共同研究の現状や、英語による講義の現状調査があります。

なお、「国際交流に関する現状分析報告」は各部局に配付しておりますが、関心のある方は国際企画室（内線 4013）にご連絡ください。



環境リスク管理のための人材養成 - 高度環境管理のその先へ -

工学研究科 環境・エネルギー工学専攻 教授 盛岡 通

■ 世間を揺るがすリスク事象

リスクという言葉が、昨今のメディアで取り上げられることが多くなってきました。単にリスクと言っても、その内容は地震や火災から、アスベスト・ダイオキシンなどの



新聞各紙で報じられるリスク

化学物質による事象や、日頃手にする製品のリスクなど、さまざまです。ここで言うリスクとは、「人間の生命や経済活動にとって望ましくない事象が発生する不確実さの程度と、その結果の大きさの程度」と定義されています⁽¹⁾。

出典(1) 日本リスク研究学会編:リスク学事典 阪急コミュニケーションズ 2006 P.2 より

■ 環境リスク管理のプロフェッショナルを育てる

アスベストなどの化学物質による人体の健康や生態系への影響、資源の循環、エネルギーの枯渇問題、地球温暖化などの環境リスクは、企業や行政の方にとっては事業リスクと直結する場合も多く見られます。また、地域社会においても重要な問題として捉えられています。

こうした背景のもと、文部科学省科学技術振興調整費の委託事業として、大阪大学「環境リスク管理のための人材養成」プログラムが平成16年度にスタートしました。高度環境管理というテーマのもとで、環境リスクを切り口として、知識やスキルを身につけるだけでなく、リスク全般に対するセンスや感性（人間力）も磨いていくことを目標としています。これは、将来的に直面するかもしれないあらゆる種類のリスクに対応するためには必要な能力です。

すでに大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻を中心として、ビジネスエンジニアリング専攻、医学系研究科、社会経済研究所、コミュニケーションデザイン・センターとの部局を越えた協力体制を築き、さらに平成18年度後期からは経済学研究科、法学研究科との連携により、合計15科目を開講する予定です。また、大阪大学のみならず、国内の他大学、企業、研究機関などの関係領域に所属する最先端の研究・教育・実務経験者との連携により、実践的な講義も提供し、受講生に対して、非常にいい刺激を与えています。

近年のリスク事象は、ひとたび起こると甚大な被害を及ぼすと同時に、社会全体を揺るがす事件として大々的に取り上げられています。特に、生活に身近なリスク事象であるほど、社会の関心も高いということはすでにお気づきかと思います。

その影響は、同じ業界のみならず、幅広い関係者に対して、さまざまな連鎖反応を引き起こすものとしても注目されています。また、想定外の新たなリスク事象に直面した後の対応によって、社会から消えてしまった組織もあれば、逆に、適切な対応によって社会からの信頼をさらに獲得した組織もあります。すなわち、現代の社会では、リスクに的確に対応できることと、それを担うための人材を育てることが必要不可欠なのです。



プログラムで提供しているカリキュラムの構成



プログラムに関わる大阪大学内部での連携体制

現在の受講生は、大阪大学大学院の学生に加え、「特別セミナー受講生」と称する受講枠を特別に設置して、企業や行政などで実際に環境リスク管理に携わる社会人の受講生も受け入れています。毎年4月と10月に公募を行っていますが、平成18年度の前期には、社会人70名あまりと大学院生30名あまりの方々が参加しており、積極的に受講しています。共同で演習を行うことで、社会人と大学院生の情報交流も進んでいます。

通常講義と並行して、特別講演会を一般公開形式で開催しています。これまで主に大阪大学中之島センターで、ほぼひと月に1回、平成18年7月末までに20回開催してきました。環境リスク関連分野の第一線で活躍している講師を招き、1時間半にわたる講演と、講師と会場との質疑応答にたっぷりの時間をとるスタイルが好評で、受講生だけではなく、一般市民、企業人、研究者など、数多くの方々に参加いただいています。



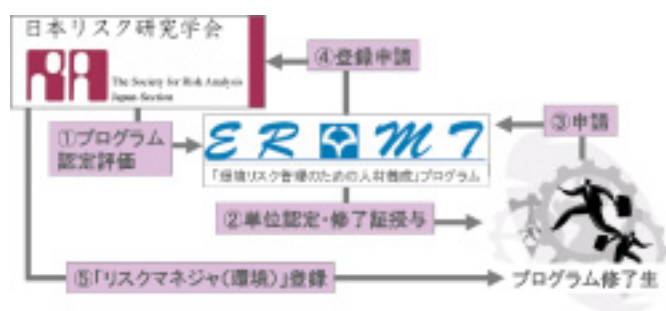
リスクコミュニケーションに関する演習の様子



特別講演会の様子

■ 日本初の「リスクマネジャ（環境）」認定制度の構築

当プログラムでは、一定の要件を満たした修了生に単に修了証を発行するのみならず、「リスクマネジャ（環境）」として認定機関（学会）に登録申請するという、日本初の



「リスクマネジャ（環境）」の認定の枠組み

認定の枠組みを構築しています。これは、日本リスク研究学会の「リスクマネジャ認定委員会」により、当プログラムが日本初のリスクマネジャ養成プログラムとして認定されたことによります。

平成17年度末には、3名の修了生（大学院生1名、社会人2名）に対して、日本初の「リスクマネジャ（環境）」の登録申請を行いました。社会人の修了生は、ベンチャー企業のアドバイザーとして修得した知識やスキルを教授したり、組織のリスク管理部門において実務的な業務に従事するなど、即戦力として活躍しています。また、大学院生の修了生も、雇用先から近い将来リスクマネジャとしての役割を期待されています。今後、平成20年度末までに、少なくとも30名の修了生を「リスクマネジャ（環境）」として登録申請する予定です。

■ 社会のニーズへ対応したプログラムへ

平成16年度のスタート以降、受講生、講師、そして学外の有識者の方々からの意見を踏まえ、カリキュラムの改訂をはじめ、時間と場所に制約を受けず復習できるe-Learningシステムの整備、社会人でも受講しやすい講義場所・時間の調整などを進めてきました。今年の6月23日に東京の経団連会館で開催したシンポジウムでは、研修プログラムや講演会の実施に対するニーズも確認しています。これを受けて、国内外の事例を参考にしながら、リスクに

対応するナレッジの多様な提供形態を模索しています。こうした社会からの要請を的確に捉え、新たな大学院教育の先進的なモデルのひとつとして、プログラムの意義を高めていきたいと考えています。

「環境リスク管理のための人材養成」プログラムホームページ
<http://rio.env.eng.osaka-u.ac.jp/risk/>

平成18年度（後期）「環境リスク管理のための人材養成」プログラム 受講生募集のご案内

現在、「環境リスク管理のための人材養成」プログラムでは、平成18年10月から開講される平成18年度（後期）の受講生を募集しています。大阪大学大学院の学生の方々は、通常の講義として受講することが可能です。工学研究科環境・エネルギー工学専攻のシラバス、ならびに当プログラムのホームページで公開しているシラバスをご参照ください。
 また、社会人の方々の出願は、平成18年9月1日（金）までの予定で現在受け付けています。出願、受講についての詳細を知りたい場合は、上記のホームページをご覧の上、プログラム推進本部事務局までお問い合わせください。

「衆議院議員 岡田克也氏 特別講演&懇談会」開催

4月24日(月)に、衆議院議員 岡田克也氏が来校され共通教育管理講義棟で、以前、通産官僚としてコンピュータプログラムの法的保護政策等において活躍されていた経験を踏まえて、政策立案、立法作業の困難さと意義を中心に「ロースクール生に期待するもの」と題して講演されました。特に、現在のわが国の「知的財産立国」の政策とその担い手としての新たな法曹への期待についての熱意溢れる説明によって、聴講していた教職員・学生共に感動し、その重要性を改めて認識させられました。

第2部は待兼山会館「つどい」で、学生達とサンドイッ



チとお茶を片手に笑顔のフリートークでした。政党色を出されず、法律を学び仕事に活かしている先輩という雰囲気、学生達の様々な遠慮のない質問にも丁寧に答えられていました。また、岡田議員から、学生に勉強の状況や大学の雰囲気、将来の展望などの質問があり、学生も真剣に、ある時は爆笑しながら答えていました。学生有志と法学研究科附属法政実務連携センターの楽しい実り多いコラボレーションの実現でした。

(大学院法学研究科・法学部)

平成18年度 大阪大学教職員および学生「インラインスケート教室」開催

大学教育実践センターでは、今年で13回目となる、大阪大学教職員および学生「インラインスケート教室」を、豊中地区第2体育館において、5月1日(月)、2日(火)の2日間にわたり開催しました。

今回の講習会では、教職員・大学院生・学生、約25名が参加されました。講習1日目では、用具の付け方、立ち方、基本の姿勢、歩き方、勢いをつけてのすべり方、簡単な曲がり方、簡単な止まり方など、はじめて経験される方にわかりやすく説明を行いました。参加された方々は、真剣に説明を聞き、熱心に練習を繰り返していました。

講習2日目では、説明を希望する方に集まっていただき、講習を行い、その一方で、すでに上手にすべることが出来る方には、自由にすべって楽しんでいただきました。また、ホッケーのスティック、パックを使い、インラインスケートによるホッケーを体験していただきました。

インラインスケートはスキー場やアイススケートリンクに行くことなく、手軽に「すべる」ことが楽しめるスポー



ツです。全身持久力の改善に高い効果があることや、ジョギングに比べ、ひざに加わる衝撃が少ないことなどが知られており、中高年齢者にも適したスポーツです。受講者にも大変好評のため、今後も引き続き開講する予定です。

(大学教育実践センター)

学務情報システム(KOAN)とWebCTに関するシンポジウム開催

5月23日(火)、大学教育実践センター共通講義棟において、教育・情報室、サイバーメディアセンター、大学教育実践センターの共催による、「学務情報システム(KOAN)とWebCTに関するシンポジウム」が開催されました。



開会の挨拶を述べる宮原総長

当日は、サイバーメディアセンター竹村治雄副センター長の司会のもと、宮原秀夫総長の挨拶に続き、鷲田清一理事・副学長が後期より全学的に導入予定の新学務情報システム「KOAN」への期待を、また高杉英一大学教育実践センター長がWebCTへの取り組みを熱く語られました。その後、下條真司サイバーメディア

アセンター長からWebベースシステムであるKOANの導入に向けた阪大の取り組みを、熊本大学の杉谷賢一総合情報基盤センター教授が、KOANと同様のWebベースの学務情報システムであるSOSEKIの導入の経験を、岩居弘樹大学教育実践センター教授から、LMSを活用した協調学習の取り組みを、また、広島大学の安武公一社会科学部社会経済システム講師から、WebCTを活用したCollaborative Learningの実践を通して、高等教育機関本来の教育のあり方ではないかというような問題提起を含んだご講演をしていただきました。

約110名の参加者による、KOANの国際化・多言語化への取り組みやネットワーク環境、SOSEKI導入前後の学生の反応、WebCTを基盤とした授業運営のあり方など、多くの質疑応答があり、大変盛況なシンポジウムとなりました。

(情報推進部情報企画課)

大阪大学と株式会社CSKホールディングスが教育情報化に関する協定を締結

5月30日(火)に、大阪大学は、株式会社CSKホールディングスと、教育情報化に関する連携推進協定を締結しました。大阪大学ではこれまで研究分野での協定締結例はありましたが、教育分野においては初めての例となります。大阪大学は2001年からコース管理システムWebCTを導入し、教育情報化支援の基盤構築プロジェクトを開始しており、今後、教育面でコース管理システムを中心にサービスを提供しているCSKと連携することで、同システム利用における遠隔サポートによる教員支援体制の構築等を行うことを予定しています。

(情報推進部情報企画課)



左から鷲田清一大阪大学理事・副学長と
福山義人CSKホールディングス代表取締役社長

大学院情報科学研究科と北京大学情報科学技術学院 教育と共同研究に関する覚書を締結

大学院情報科学研究科は、北京大学情報科学技術学院との間で、教育と共同研究に関する覚書を5月30日(火)北京大学において締結しました。

本研究科では、文部科学省の国際化推進プログラム(戦略的国際連携支援)に採択された「融合科学を国際的視野で先導する人材の育成」を推進しています。環太平洋諸国の大学の協力を得て、学生を教育しており、今回の覚書締結で、両組織間の交流がますます発展し、優れた人材育成のための国際的基盤の発展につながることが期待されます。

また、本研究科は魅力ある大学院教育イニシアティブ事業に採択された「ソフトウェアデザイン工学高度人材育成コア」も推進しており、これらを核に、専門分野で国際的に活躍できる人材育成を目指しています。

覚書締結時には、西尾章治郎大学院情報科学研究科長に3名の教授が北京大学へ同行し、大阪大学の教育研究を紹介しました。また、コンピュータビジョンやソフトウェア工学の研究グループと情報交換を行い、今後の教育研究における協力関係の発展について議論しました。これまでに



覚書締結後、握手する何新貴北京大学情報科学技術学院長(右)と西尾研究科長(左)

も共同研究が行われてきておりますが、これを機に、情報科学に関わる幅広い分野での共同研究や教育協力が期待されています。

(大学院情報科学研究科)

大学院高等司法研究科「理系から法科大学院へ ミニ講演+入試説明会」開催

大学院高等司法研究科は6月1日(木)コンベンションセンターにおいて「理系から法科大学院へ ミニ講演+入試説明会」を開催しました。

様々な学部・研究科から概ね40人の参加があり、大学院高等司法研究科 青江秀史教授が「なぜ理系からロースクール?」「法律は簡単」「どのような勉強?」を身近な言葉で講演を行い、「入試説明会」では、平成19年度からの「入試制度の変更」を中心として説明と質疑が行われました。



質疑応答の一部

- Q. 法律を学んだことのない学生への配慮はありますか。
- A. ・既修の学生との交流、前期の後半にはハンデを感じなくなる丁寧な授業をしています。
- ・入学前に合格者専用サイトで、参考図書、レポートなどを指示し、どのような勉強をすればよいか指導を行います。
- Q. 他大学と比較した時の特徴(カラー)を教えてください。
- A. ・学生に「あたたかい」ことが一番の特徴です。一生懸命勉強している学生に、各教員が熱意を持ってそれに応えています。
- ・あらゆるキャリアプランに十分応える科目提供を行っています。特に「ビジネス法」については、知的財産科目など理系出身の(技術・知財のわかる)法曹のニーズにしていると高い評価を頂いています。

会場は真摯なやりとりの中にも温かな雰囲気包まれていました。

(大学院高等司法研究科)

国立大学歯学部長・歯学部附属病院長会議開催

平成 18 年度国立大学歯学部長・歯学部附属病院長会議が 6 月 1 日(木)、大阪大学の当番により豊中市内で開催されました。

当日の午前には、歯学部附属病院長会議が開催され、デンタルユニットの整備や同病院長会議の今後のあり方などについて、各大学の情報交換と活発な協議が行われました。

午後に開催された歯学部長・歯学部附属病院長会議には、文部科学省高等教育局から栗山雅秀医学教育課長、下敷領強国立大学法人支援課課長補佐らを招き、今後の歯科医師後期臨床研修についてや本会議運営などについて熱心な協議が行われました。

6 月 2 日(金)の午前中には、歯学部長・歯学部附属病院長懇談会が開催され、歯学部が当面する課題などについて情報・意見交換が活発に行われました。

(大学院歯学研究科・歯学部)



洪庵忌 - 適塾の夕べ - 開催

適塾を開いた緒方洪庵の命日 6 月 10 日前後に毎年行われる、洪庵の遺業を偲ぶ催し「洪庵忌 - 適塾の夕べ - 」が、今年度も 6 月 5 日(月)午後 4 時から適塾 1 階客座敷において開催されました。

今回は、宮原秀夫総長、各部局長を始め適塾記念会役員など関係者約 30 名の出席があり、当時の塾生が学んだ時

と同じ雰囲気の中、米原 謙国際公共政策研究科教授が『福沢諭吉：適塾時代とその後』と題して、また、井上 恭工学研究科教授が『量子情報の話 - 究極の暗号通信から超並列情報処理まで』と題してそれぞれ講演を行いました。

(総務部総務課)



米原教授



井上教授

平成18年度(第27回)基礎工学部シグマ講演会開催

平成18年度(第27回)基礎工学部シグマ講演会が6月5日(月)15時から、カリフォルニア大学・サンタバーバラ校物理学教授で、2000年度ノーベル化学賞受賞者でもあるAlan J. Heeger教授を講師にお招きして、21世紀COEプログラム「物質機能の科学的解明とナノ工学の創出」、21世紀COEプログラム「自然共生化学の創成」ならびに「魅力ある大学院教育」イニシアティブプログラム「学際新領域を先導する21世紀基礎工学教育」との共催により、基



礎工学部国際棟(シグマホール)において開催されました。

講演会は、戸部義人評議員の挨拶、およびHeeger教授と旧知である鈴木 直理事・副学長の挨拶につづいて、Heeger教授が「Plastic Electronics and Opto-electronics: Opportunities and Challenges」の演題で講演されました。教授は、物理学と化学の学際領域を切り開き、導電性高分子の発見を契機として現在有機エレクトロニクス・分子エレクトロニクスと呼ばれる分野を築かれた先駆者の一人で、筑波大学名誉教授の白川英樹博士とのノーベル賞共同受賞など日本でも幅広く知られた研究者です。本講演では、ノーベル賞受賞に至る過程での研究展開を、ポリアセチレン中のソリトン励起の実証研究、可塑性エレクトロニクスと光エレクトロニクスにおける最先端研究事例をもとに、将来への展望を含めて、具体的かつ丁寧にお話しいただきました。この講演会は、シグマホールからG棟の2教室へも基礎工学研究科科目への英語教材として同時配信され、基礎工学内外の教職員、学生など約350名が聴講しましたが、Heeger教授の分かりやすかつ熱意にあふれた講演と、すべての質問に対しての丁寧かつ詳細な回答は聴衆にとって示唆に富むものであり、大変有意義なものでありました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

薬学部・薬学研究科外国人留学生等歓迎パーティー開催

平成18年度薬学部・薬学研究科外国人留学生等歓迎パーティーが、6月8日(木)午後5時30分より薬学部2号館セミナー室において、約90名の参加を得て開催されました。

パーティーは山元 弘大学院薬学研究科長の開会挨拶、北 泰行教授の発声による乾杯で始められ、外国人留学生、外国人研究員およびその家族に加えて、多くの教員、学生が加わり、留学生間の交歓に加え、留学生にとって日頃接する機会の少ない他分野の教員、学生と懇談する良い機会となりました。



外国人留学生・研究員の出身国は、中国、タイ、コンゴ、ルーマニア、インドネシア、バングラディッシュ、ドイツ、インドと様々でしたが、自己紹介の際には多くの参加者が流暢な日本語で、学業・研究に対する抱負を語り、拍手喝采が送られました。また、参加者のご家族の中には元気に走り回る子供もいて、皆の笑顔を誘っていました。終始、楽しい雰囲気の中で懇親を深め、午後7時、村上啓寿教授による閉会挨拶の後に名残を惜しみつつ散会となりました。

(大学院薬学研究科・薬学部)

平成18年度大阪大学主任研修実施

平成18年度大阪大学主任研修が、6月7日(水)から9日(金)までの3日間にわたってコンベンションセンターで行われました。

本研修は、主任としてのその立場と役割を自覚し、マネジメントに関する理解を深め、職務に対する応用を図るとともに、自己啓発の指針を確立させることにより職員の資質の向上を図ることを目的として、37名(内女性16名)が受講しました。

昨年度に引き続いて、講義・演習を業者委託とし、㈱マネジメントサービスセンター藤井伸也講師により行われま



した。

受講生は、「主任に求められる能力」についての講義に熱心に聞き入るとともに、「ゲーム おもしろ村(情報伝達)」「インバケット演習(未決案件処理)」「職場での問題解決」等の演習を、普段と異なる状況設定の下、班別討議・全体討議を行いました。最初は受け身で指示を待つ受講生が多く見受けられましたが、討議を通じ、固定観念にとらわれず発想転換し、適切に対応するなど、活発な意見交換が行われ、全員が意欲的に取り組む姿勢がうかがえました。

研修最終日に「自己啓発計画書の作成」が行われ、各人が、現在の自分の分析、将来のなりたい自分、それを実現するための計画を作成しました。計画書については、研修終了後、上司に見せたうえでコメントをもらうよう講師から指示があり、全員とまどいの色は隠せませんでしたが、自己啓発の一端として、報告の決意を固めていたようでした。

本研修には、庶務・会計・教務など分野の異なる主任が受講しましたが、演習のほか、休憩時間などを通じて、お互いの親睦を深め合い、全員、所定の課程を無事修了しました。

(総務部人事課)

平成18年度医学部御遺骨返還式実施

6月9日(金)午後1時30分から医学部共通棟3階大会議室において、御遺骨返還式がしめやかに執り行われました。

この式典は、毎年行われているものであり、系統解剖のために篤志団体である大阪大学白菊会から献体をいただき、医学部学生が平成17年度中に解剖させていただいた方々の御遺骨を御遺族にお返しする行事で、今回で第79回を迎えました。

当日は、曇り空のなか約40名の御遺族が出席され、医学部からは遠山正彌学部長はじめ、解剖学教室の関係教員、八幡親明白菊会会長等が出席されました。

式典は、まず献体者の方々の御霊に対して参列者全員が黙祷を捧げた後、遠山学部長から献体者の尊い御遺志と御



遺族の深い御理解に対して深く感謝を申し上げる旨の挨拶がありました。つづいて、19名分の御遺骨が遠山学部長から御遺族一人ひとりに返還され、併せて八幡白菊会会長から御供物が手渡されました。最後に、解剖学教室を代表して、神経生物学・形態学講座(旧解剖学第一講座)の内山安男教授からお礼の言葉が述べられ、滞りなく御遺骨返還式は終了しました。

なお、式典終了後、御遺族及び医学部関係教員がそろって吹田キャンパス内にある「大阪大学医学部・歯学部献体慰霊碑」に献花を行い、献体者の御冥福をお祈りして、午後2時15分に散会しました。

(大学院医学系研究科・医学部)

第3回 大学教育セミナー開催

6月9日(金)に、第3回大学教育セミナーが、大学教育実践センター6階大会議室で開催されました。本セミナーは、新任教員研修の一環として企画されたが、実践センターの教育改善活動の一環でもあり、今後の大阪大学の教育面に役立ててもらうために全教員、学生、職員を対象に実施されました。

まず講演1「授業デザインのための秘訣 - 成長するティップス先生」では、名城大学の池田輝政教授が、前任校である名古屋大学における授業法のノウハウを、氏が書かれ



た「成長するティップス先生」を通して紹介されました。「成長するティップス先生」は、教えることの手法やコツを大学の教員用として書かれた本ですが、一般的ハウツーものとは一線を画した目的達成に向けた授業の効率的な流れを産み出すためのものであり、いろいろな具体的事例を交えて分かりやすく話されました。

次に講演2「新しい英語授業：リアルタイムのニュースを通して国際英語の共同体に参加する」では、日野信行言語文化研究科助教授から大阪大学での新しい英語授業の試みについて話されました。本授業は、授業当日の衛星放送TVの英語ニュースを視聴した上で、世界中の電子版英字新聞をリアルタイムで読み比べながら英語で話し合うという、国際英語・メディアリテラシー教育・グローバル教育・正統的周辺参加などの教育的諸概念を、統合的に実践する授業内容であり、授業の様子をビデオで紹介され、大変臨場感のある講演となりました。

いずれの講演も興味深く、大阪大学の授業を考える上で全教員に大変参考となる内容でした。当日の参加者は約35名で、報告をめぐっては活発な討議がなされました。

(大学教育実践センター)

適塾特別展示開催

平成18年度の適塾特別展示「適塾の所蔵品特別展 緒方洪庵の手紙」が、本学と適塾記念会との共催で5月30日(火)から6月11日(日)まで適塾において開催されました。

今回は、特別展として数ある所蔵品の中から、緒方洪庵が備前国の医師頓宮篤弼や大和柳生藩家老小山田主鈴らに宛ててしたためた手紙を中心に通常未公開のものを公開しました。

12日間の期間中、約1,150名の参観者が訪れ、好評のうちに閉幕しました。

(総務部総務課)



「理学研究科・理学部セクシュアル・ハラスメントに関する研修会」を実施

大学院理学研究科・理学部においては、毎年度、新人教職員・学生を対象として「理学研究科・理学部セクシュアル・ハラスメントに関する研修会」を行っています。

本年度は、6月13日(火)、6月15日(木)の2日間、理学研究科D501講義室を会場として実施しました。

理学研究科・理学部では、教育研究活動で十分な成果を上げ、社会的使命を果たしていくために、男女の区別なく、全ての者が互いに尊敬し合い、対等にコミュニケーションを行い、平等に能力を発揮し、協力し合う環境づくりが必要と考えているものです。このため、セクシュアル・ハラスメントの防止等に関する規程を設け、理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会並びに部局相談員を置き、セクシュアル・ハラスメントの防止に向け、研究科・学部を挙げて取り組んできています。

金澤 浩理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会委員長、久保田弓子全学相談員・理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会委員・部局相談員、小磯憲史人権問題委員会委員・理学研究科等セクシュアル・ハラスメント対策委員会副委員長の方々が「セクシュアルハラスメントのない快適なキャンパス」と題した資料を作



成しました。これをもとに、研修会は、小谷理学研究科長の挨拶に始まり、久保田相談員及び小磯委員による具体的に知っておいてもらわなければならないことや、セクシュアル・ハラスメントの被害に遭った場合の相談体制等について、講演が行われました。

両日で約250名の参加者があり、熱心に聴講する姿が多数見られ、セクシュアル・ハラスメントの防止に対する意識を高めることができました。

(大学院理学研究科・理学部)

医学系研究科正面玄関前に桜を植樹

6月15日(木)、梅雨空の合間を縫って、医学部銅像前の緑地帯に桜の植樹が行われました。この桜の木は遠山正彌大学院医学系研究科長の寄附によるもので、ソメイヨシノ種が6本植えられました。順調に成育すれば、来年の春には花が咲く可能性があるとのことです。

遠山研究科長は、「満開の桜の下を学生に歩いてもらいたい。また将来、学生が大阪大学で学んだ日々を思い返すとき、この桜がその思い出を彩ってくれば」との思いを抱き、桜の植樹を思い立ったとのことです。

大阪大学の発展に力を注がれる遠山研究科長の、学生への温かい心遣いであります。

(大学院医学系研究科・医学部)



植樹された桜(右から3人目が遠山研究科長)

大学院基礎工学研究科・基礎工学部心のケア(メンタル・ヘルスセミナー)実施

基礎工学研究科では、こころのケア(メンタル・ヘルスセミナー)を6月15日(木)基礎工学研究科B棟3階大講義室において行いました。

このセミナーは、基礎工学研究科・基礎工学部等教職員及び学生を対象に、心の健康を自ら守りメンタル・ヘルスについて正しい知識を深めるとともに、自主的、計画的及び継続的に心の健康作りを実施することを目的に初めて実施したものであり、第1回目のセミナーには、基礎工学研究科、豊中地区に勤務する情報科学研究科、生命機能研究科、コミュニケーションデザイン・センター、極限量子科学研究センター、太陽エネルギー化学研究センター及びナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構から約140名の教職員及び学生等の参加がありました。

当日は、大学院人間科学研究科の井村 修教授による「うつ」を知って健やかに生きる」の講演が行われ、参加した約140名の教職員及び学生等は、誰でも罹患するうつ病に



ついて正しい知識を深め、熱心に聞き入っていました。

講演終了後は質疑応答が行われ、活発な意見交換・情報交換の場となり、セミナーは盛況のうちに終了いたしました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

第7回(平成18年度)課外研究奨励費伝達式

第7回(平成18年度)課外研究奨励費の伝達式が、宮原秀夫総長、大和谷 厚学生生活委員会委員長等の出席のもと、6月20日(火)に事務局301会議室において行われました。

課外研究奨励費は、「学部学生の研究意識の向上」を目的とし、個人又はグループ単位の学生自身による研究テーマを募集し、独創的かつ意欲的であると認められたテーマに対して授与されるものです。

今回は、16件の研究テーマの応募があり、8件が採択されました。

伝達式では、初めに大和谷委員長から選考経過について説明があり、続いて総長から受賞者に対しての賞状の授与と激励の言葉があり、その後、各受賞者から抱負等が述べられ、終始和やかな雰囲気の中無事終了しました。



今回採択された研究テーマ

- ・「違いを尊重する社会」を支える市民活動の在り方
～カナダ・バンクーバー市の性的少数者青年支援活動の現状と効果～
- ・国際法模擬裁判大会への取り組みを通じた国際法の研究
- ・阪大のブランド力向上とユニバーシティ・アイデンティティ(UI)戦略
- ・インターカレッジ政策提言コンペティションを通じた学生の政策構想力・発信力の育成
- ・BMP誘導性骨芽細胞分化の分子メカニズムの解明
- ・脱灰エナメル質再生の検討
- ・フォーミュラカーの企画、設計および製作
- ・待兼池の富栄養化の原因の解明

(学生部学務課)

大阪大学薬学部創立50周年記念事業

第7回地域研究交流フォーラム「植物資源の新規機能性の開拓」開催

大学院薬学研究科主催、FFI ジャーナル協賛の第7回地域研究交流フォーラムが、6月20日(火)千里ライフサイエンスセンターで開催されました。本フォーラムは、薬学部創立50周年記念事業として行われ、今回は「植物資源の新規機能性の開拓」をテーマとして、平山佳伸大阪市立大学医学研究科教授に「医薬品・食品の効能効果の評価」、有井雅幸・キッコーマン(株)バイオケミカル事業部機能性食品グループ長に「大豆イソフラボンやブドウ種子プロアントシアニジンの機能性と安全性」、柴田浩志サントリー(株)健康科学研究所部長に「植物性乳酸菌 *Lactobacillus pentosus* S-PT84 株の免疫調節機能」、森山茂三栄源エフ・エフ・アイ(株)取締役新規開発部長に「最近話題の食品素材とその応用(植物ステロール、L-カルニチン、CoQ10)」、村上啓寿大学院薬学研究科教授に「新規生物活性を標的とする薬用植物由来の天然物」と題する講演を頂きました。

今回は、180名を超える方に参加いただき、活発な質疑も行われたことから、多数の健康食品に含有されている植



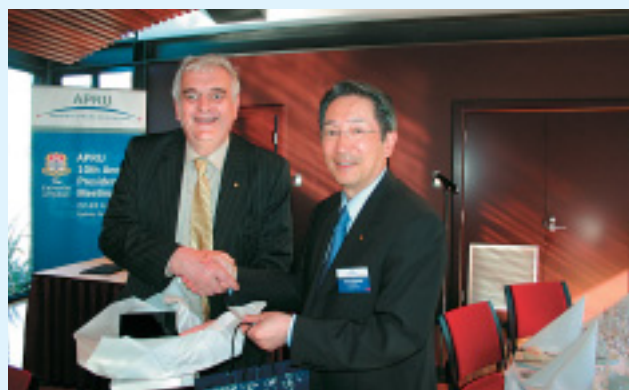
物資源に関する関心の高さを実感いたしました。今後も、本フォーラムが社会と大学の窓口として機能することにより、社会のニーズにも耳を傾けた地域の中の大学院薬学研究科として発展していくための一助となることを切に望むものであります。

(大学院薬学研究科・薬学部)

第10回APRU年次学長会議(於:シドニー市)に宮原総長出席

日本の大学では本学及び東京大学等5大学が加盟しているAPRU(環太平洋大学協会)によるフォーラム及び第10回APRU年次学長会議が、6月22日(木)から24日(土)まで秋の気配がたどようオーストラリア・シドニー大学で開催されました。

本会議では、新議長にシドニー大学長が選出され、また、新規メンバー校候補にメルボルン大学が了承されました。宮原秀夫総長は、本会議に参加するとともに、最終日程に予定されたセッションの発言者として最後にスピーチを行い、ここでは、本学の国際交流戦略を説明し、本年の主要な事業として、4月のサンフランシスコでの地震関連のシンポジウムの概要、タイ・バンコクにおける感染症対策等



新議長のGavin Brownシドニー大学長と握手する宮原総長

への新たな研究の展開、海外における教育研究の3海外拠点及び12月に実施予定の米国・サンディエゴ市での海外フォーラムの開催等を紹介し、加盟校との協力関係と本会議が果たす役割について簡潔に説明し、出席の各学長から好評を得ました。

今回の会議には、本学から、宮原総長を始め、同会議のSenior Staffとしての鈴木直理事・副学長及び辻毅一郎総長補佐並びに国際企画室の石川真由美特任助教授が参加し、各大学長等との懇談・交流を通じて、本学の国際化への展開と実績を印象づけるとともに、相互理解を深めることができました。

(研究推進・国際部国際交流課)



会議出席の各大学長(最前列右から2人目:宮原総長)

名誉教授招待懇談会開催

本年度の名誉教授招待懇談会が6月27日(火)の午後3時30分から、産業科学研究所管理棟の講堂において、87名の名誉教授の出席のもとに開催されました。

宮原秀夫総長の開会の挨拶で始まり、昨年秋の例会以降にご逝去された名誉教授の先生方への黙祷、次に、今年度の学士院賞ならびに春の叙勲を受けられた名誉教授の先生方が紹介され、引き続き、当日ご出席の瑞宝中綬章を受けられた中林敏夫名誉教授からご挨拶をいただきました。

その後、宮原総長から「大阪大学の近況報告」として、パワーポイントを用いながら昨年度に実施した主要事項の説明や、大阪外国語大学との統合についての報告があり、整備された豊中キャンパスの阪大坂や吹田キャンパスの本部事務局棟前が写真で紹介されました。

続いて、銀杏会館内の「ミネルバ」に会場を移して開かれた懇親会では、冒頭に役員はじめ部局長の紹介が行われ、菊川 眞名誉教授が大阪大学での思い出話を交えながら乾



宮原総長の挨拶



春の叙勲を受けられた中林名誉教授の挨拶



乾杯の音頭を取る菊川名誉教授



杯の音頭を取り、出席者はお互いの近況などを話題に旧交を温めながら、和やかな雰囲気の中で懇談が続けられました。また、会場内では名誉教授の先生方から、総長はじめ役員、部局長に大学の様子について質問や感想が寄せられる場面も見られ、午後6時30分に盛会のうちに終了しました。

(総務部総務課)

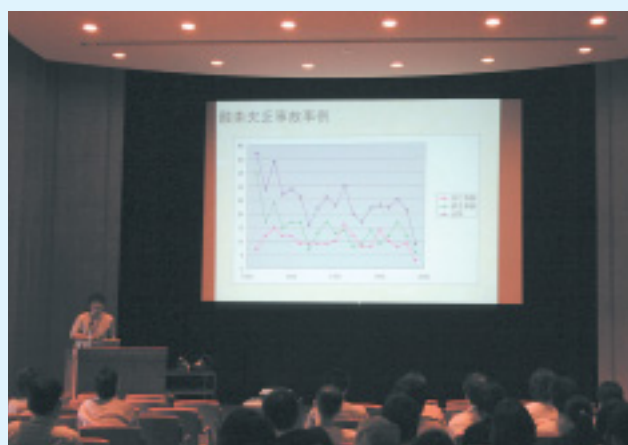
酸素欠乏事故防止講習会(吹田地区)の実施

安全衛生管理部では、6月29日(木)15時から、銀杏会館阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて、酸素欠乏事故防止講習会を実施しました。

この講習会は、NMR、MRI等の超伝導磁石、大型クライオスタットのユーザー及び液体窒素、液体ヘリウムを大量に取り扱う学生、教職員を対象に酸素欠乏の危険性を理解し、事故防止や安全意識の向上に役立ててもらうために実施したものです。

当日は、171人の参加があり、講師の安全衛生管理部・山本 仁助教授から、NMR等のクエンチ事故による酸素欠乏の危険性、関係法令、事故防止上の注意点、保護具の取り扱いについて説明がありました。

(安全衛生管理部)



安全衛生管理部・山本助教授による説明

第1回「学生海外短期研究留学助成」授与式開催

第1回「学生海外短期研究留学助成」授与式が、7月3日(月)に事務局401会議室において開催されました。

学生海外短期研究留学助成は、国際性豊かで創造的な研究開発活動を独力で展開できる若手博士人材の育成を目的として、大阪大学教育研究等支援事業経費により、大学院博士後期課程に在学する学生の短期研究留学等の研究活動を支援する制度です。

このたび、本制度による第1回目の助成金授与者9名が決定したことに伴い、北見理事・事務局長、選考委員、並びに各受賞者の指導教員及び研究科長等が列席される中で、宮原総長から一人ひとりに表彰状の授与が行われ、「益々、勉学・研究に励んで欲しい」と激励されました。

受賞者

- ・文学研究科 関 良子 D2
「文学と風土史の関わり - イギリス・ヴィクトリア朝文学における中世主義を題材として - 」
- ・理学研究科 津村 浩二 D3
「CPの破れの起源と質量生成のメカニズム」
- ・医学系研究科 中桐 伴行 D1
「リンパ球表面抗原とサイトカイン産生の分析による肺移植後急性拒絶反応のモニタリング」
- ・医学系研究科 伊藤 ゆり D3
「がん患者の生存率比較における疾病登録精度の影響について：統計学的評価方法論の検討」
- ・工学研究科 林 麟晏 D2
「免疫電子顕微鏡法に関する研究」



- ・言語文化研究科 石川 弓子 D2
「極小主義理論におけるコントロール構文の多言語的分析」
- ・国際公共政策研究科 木谷 耕平 D1
「貿易、投資のグローバル化、及び経済成長における中小企業の役割と中小企業政策：アジア・太平洋地域についての実証研究」
- ・国際公共政策研究科 原本 知実 D3
「紛争と文化財 欧州での文化財の政治的利用・破壊・保護・活用の歴史と現状」
- ・情報科学研究科 武田 伸悟 D2
「グリッドコンピューティングのための安全な監査技術に関する共同研究」

(研究推進・国際部学生交流推進課)

全国安全週間にあわせた実験機器展示会・安全講演講習会の実施

社団法人大阪大学工業会（工学部同窓会）、大学院工学研究科及び安全衛生管理部では、全国安全週間（7月1日～7月7日）にあわせて、7月4日（火）、5日（水）にコンベンションセンターにおいて、実験機器展示会・安全講演講習会を実施しました。

実験機器展示会では、約100社余りの安全衛生保護具や理化学機器のメーカー等による展示ブースが設けられ、多



展示会の様子



守山保健センター長による説明

数の学生、教職員に来場いただき、メーカー等の担当者による説明を熱心に聞く姿が見られました。

また、安全講演講習会では、安全衛生管理部・山本 仁助教授から、非化学系のための薬品取り扱いについて、守山敏樹保健センター長から、実験系の研究における注意事項について、それぞれ具体的な事例を踏まえた説明がありました。

（大学院工学研究科・工学部、安全衛生管理部）

在阪報道各社と大阪大学との懇談会開催

7月11日（火）に在阪報道各社との懇談会が中之島センターで開催されました。この懇談会は、本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的として毎年開催されているものです。

午後4時から中之島センター9階の会議室において開催された懇談会には、本学からは宮原秀夫総長をはじめ、各理事、総長補佐等が、報道関係からは8機関から12名の出席がありました。宮原総長の挨拶の後、本学の管理運営に関する質疑応答を中心に意見交換が行われました。

また、今回も昨年と同様に、若手教員による教育・研究トピックスのプレゼンテーションが行われました。



引き続き、交流サロンにおいて懇親会が催され、プレゼンテーションを行った教員も加わり、報道関係者との情報交換が活発に行われました。

<教育・研究トピックスのプレゼンテーション>

「アートとテクノロジーの融合」

大学院基礎工学研究科 加藤 博一 助教授

「細胞のナノ回転分子モーターを利用した分子チャロQ」

産業科学研究所 野地 博行 教授

「地域社会との協働による大学都市の創造」

キャンパスデザイン室 木多 道宏 助教授

（総務部評価・広報課）

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が7月13日(木)に基礎工学部シグマホールにおいて開催されました。この講演会は毎年7月及び12月に本学の人権問題啓発行事の一環として開催されているもので、今回は弁護士の養父知美氏を講師に招き、「アカデミック・ハラスメントをなくすために」と題してご講演いただきました。

講演会では、アカデミック・ハラスメントの具体的事例や大学に求められる取り組みなどについてお話しいただき、当日参加した約60名の教職員・学生は最後まで大変熱心に聴講しました。講演終了後には活発な質疑応答が行われるなど大変有意義な講演会となりました。

(総務部総務課)

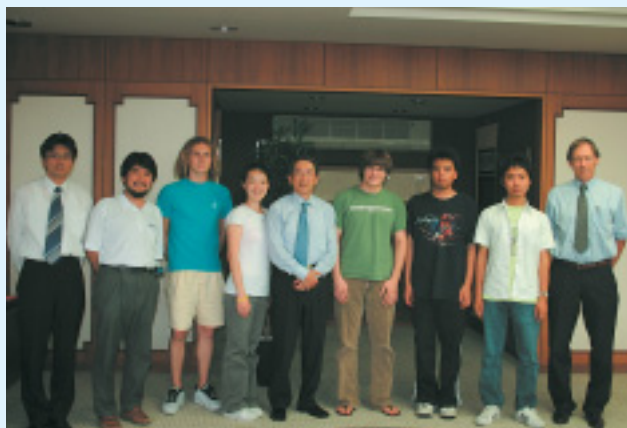


養父知美氏

UCSDとサイバーメディアセンターの部局間交流協定に基づく学生交流

サイバーメディアセンターでは、本研究機関における研究開発および教育の国際化を目的とし、アジア太平洋地域でのグリッド技術コミュニティであるPRAGMA等を通じ米国カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)との連携を強く進めてきました。その中で、今年度も、UCSDの推進する海外インターンシッププログラムPRIMEの受け入れ研究機関として4名の学部学生を受け入れ、当該学生の研修を通じた国際交流活動を推進しています。また、これに呼応する形で大学院情報科学研究科ではPRIUSと呼ばれる融合科学を推進する国際教育プログラムを推進しており、UCSDやオーストラリア、台湾などPRAGMA参加機関に学生を派遣しています。

7月14日(金)に運営責任者であるPeter Arzberger氏が来日されたのにあわせて、宮原秀夫総長とPRIMEの学生、PRIUSプロジェクト特任助教授の伊達進大学院情報科学研究科特任助教授らと懇談を行いました。



左から、伊達特任助教授、下條真司サイバーメディアセンター長、Marshall Levesque 君、Cathy Chang さん、宮原秀夫総長、Daniel Goodman 君、Robert Sy 君、市川晃平君(情報科学研究科 D2 在籍中)、Peter Arzberger 氏。

(サイバーメディアセンター)

「ぐっ!と大阪大学」阪大船ふたたび!

(トピックスからの続き)

昨年に続き2度目の船出ですが、7月13日(木)には、船渡御の安全祈願及び盛会を祈念するため、初めて天神祭の本宮である大阪天満宮において、本学応援団、チアリーダーによる奉納演舞が行われました。

鷲田清一副学長とともに本殿に参拝、お祓いを受けた後、炎天下の下、境内において演舞を奉納しました。大きな太鼓の音や、団員の発する力強い声に、参拝客や天神祭に備え練習をされていた氏子の方々も手を止め、威風堂々とした本学応援団に対して、大きな拍手が送られました。



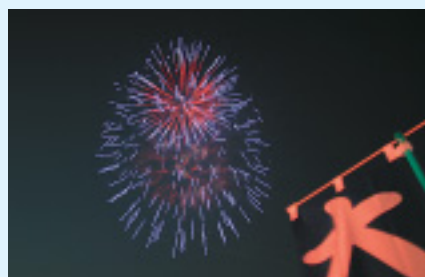
今年の船渡御は、本学の他にも関西大学が新たに船を出され、船渡御の先輩格である神戸大学とともに、船出前には、本学宮原秀夫総長と各大学の学長が互いにエールを交歓し、各校オリジナルの法被を交換するなど、和やかな雰囲気かつライバル心(?)を秘めた船上大学間交流の楽しいひとときもありました。

今回も、本学同窓会連合会会長の熊谷信昭元総長、同副会長の金森順次郎元総長をはじめ、旧制大阪高校同窓会や各部局同窓会の方々、また育友会の方々が乗船され、現役部局長等とともに大阪の夏を満喫されました。特に、今年1月に発足した「北米地区同窓会」のメンバーで、遠くアメリカ合衆国ワシントンDCから参加された同窓生の方もおられ、母校大阪大学ファミリーとして夏の行事に参加されたことを心から喜んでおられました。

また、船上を盛り上げる本学応援団、チアリーダーの演舞と、軽音楽サークルのジャズの調べには、参加者をはじめ川岸の観客の方々からもあたたかい拍手がおくられていました。



右から関西大学河田梯一学長、宮原総長、関西大学森本靖一郎理事長、神戸大学野上智行学長



1周年を迎えた同窓会連合会を祝福する
熊谷信昭同窓会連合会会長(左)と宮原総長



軽音楽サークル「swing」の軽快な演奏も雰囲気
を盛り上げました。

当日の様子は、同窓会連合会のホームページもご覧下さい。 <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

(総務部総務課)

第26回大阪大学共済組合ボウリング大会実施

平成18年度共済組合福祉事業の一環として、ボウリング大会が去る7月18日(火)～21日(金)及び28日(金)の5日間にわたって新大阪のイーグルボウルにおいて行われました。



宮原秀夫総長による始球式

本年度の参加人数は563名で、1人2ゲームの合計得点を競う個人戦により熱戦が繰り広げられました。

なお、入賞者は次のとおりです。

男子の部(参加人数328名)

優勝(410点)	医学系研究科	岡田 行 弘
準優勝(372点)	薬学研究科	緒 方 洋一郎
第3位(355点)	施設部企画課	越 智 学

女子の部(参加人数235名)

優勝(335点)	医学部附属病院	名 加 英 子
準優勝(303点)	歯学研究科	後 藤 梓
第3位(291点)	医学系研究科	清 水 宏 実

(総務部人事課)

「第1回大阪大学睡眠学談話会」開催

7月14日(金)に大阪大学睡眠学談話会が開催されました。大阪大学では本年4月に医学部附属病院に診療科横断的な「睡眠医療センター」を設置し、歯学部附属病院の協力も得て、20以上の診療科・診療部門の協力の下に、総合的な「眠りの診療」を実施することになりました。さらに、このセンターを核に基礎医学や社会医学部門をも含んだ学際的な睡眠学研究拠点を大阪大学に確立しようという壮大な構想が本談話会発足の趣旨です。その記念すべき第1回の談話会に大阪バイオサイエンス研究所理事長の早石 修先生を講師にお招きして「睡眠の謎に迫る - わが睡眠医学研究 - 」と題して講演いただきました。

早石先生は本学医学部のご出身、酸素添加酵素の発見、プロスタグランジンの生化学で高名であり、「眠りの科学」をライフワークに、今でも第一線の研究に携わっておられます。講演では睡眠科学の歴史から話が始まり、睡眠物質としてのプロスタグランジン D2 の発見の経緯と最新の知



講演を行う早石先生

見まで、長時間にわたり全くお歳を感じさせない迫力でお話いただきました。談話会には院生や若手の研究者が多数参加していたことから、先生



早石先生を囲んでの懇談

は睡眠研究が如何に面白いかと若い研究者を鼓舞していただき、さながら噂に聞く「早石道場」を彷彿としました。

この講演に先立ち、早石先生を囲み、遠山正彌大学院医学系研究科長、荻原俊男医学部附属病院長、武田雅俊睡眠医療センター長、大阪バイオサイエンス研究所の裏出良博部長、そして、この談話会の世話人の森本兼義、杉田義郎、磯 博康、大和谷 厚の各教授との懇談を行いました。その中で、「睡眠は21世紀に残された最大の謎である。各国がしのぎを削って研究を行っている。阪大は戦後すぐの脳波計の基礎研究、それを武器にしての睡眠の臨床研究、覚醒に関与するヒスタミン神経系の発見など、わが国の睡眠研究の草分けであり、さらに、学際的医療、基礎と臨床の融合、医工連携、製薬企業や医療機器メーカーとの共同研究などの実績を礎にし、日本、アジア、そして世界の睡眠学の模範となる研究拠点を作る条件が揃っている。」という話で盛り上がり、一同、意を強くしました。

(大学院医学系研究科・医学部)

西口公之名誉教授「瑞宝中綬章」受章

西口公之名誉教授が、平成 18 年春の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。

西口名誉教授の研究分野は、溶接物理ならびに施工面から見た溶接工学全般にわたり、溶接機器や溶接機構、溶接施工方法、溶接作業の前工程となる切断機器、切断機構、切断方法等の個別分野のみならず、これらを統合するための加工システム論とシステム信頼性向上手法等の研究に尽力されました。

今回の受章は、これらの学問的業績とともに、学生の教育、後進の育成ならびに学・協会活動を初めとした社会貢献によって、我が国の学術発展のために多大の貢献を果たしたことが評価されたものです。

(大学院工学研究科・工学部)

【お詫び】

西口公之名誉教授の叙勲の記事は、阪大 NOW No.90 (2006.6 月号) の「春の褒章と叙勲」で掲載していませんでしたので、今回掲載いたします。

山岡慶祐君「第19回(2005年秋季)応用物理学会講演奨励賞」受賞

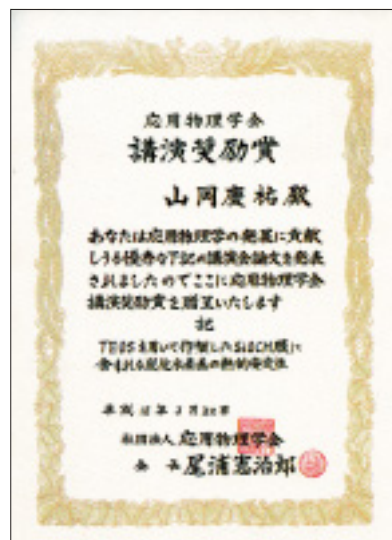
大学院工学研究科マテリアル生産科学専攻(マテリアル科学コース; 旧マテリアル科学専攻) 結晶成長工学領域(担当: 藤原康文教授) 博士前期課程 2 年山岡慶祐君が、第 19 回(2005 年秋季) 応用物理学会講演奨励賞を受賞しました。

この賞は、応用物理学会の春季及び秋季の学術講演会において、応用物理学の発展に貢献しうる優秀な一般講演論文を発表した若手会員(33 才以下) に授与されるものです。

今回対象となった講演は、「TEOS を用いて作製した SiOCH 膜に含まれる炭化水素基の熱的安定性(著者: 山岡慶祐、吉迫裕司、加藤英明、築山大輔、寺井慶和、藤原康文)」で、プラズマ CVD 法により室温成膜した Si 系酸化膜が熱酸化膜に匹敵する高い電氣的絶縁性を示すこと、また、その絶縁性が含有する炭化水素基と強い相関を示すことを明らかにしたことが評価されました。

今回は 2005 年秋季学術講演会(徳島大学)で発表された 575 件の申請講演から 34 名が選出されました。尚、本研究は、21 世紀 COE プログラム「構造・機能先端材料デザイン研究拠点の形成」(拠点リーダー: 馬越佑吉教授)のもとで推進されました。

(大学院工学研究科・工学部)



笹井宏明教授「第23回日本化学会学術賞」及び「第38回市村学術賞貢献賞」受賞

産業科学研究所の笹井宏明教授が、「第23回日本化学会学術賞」及び「第38回市村学術賞貢献賞」を受賞しました。

日本化学会学術賞は、化学の基礎または応用において先導的・開拓的かつ優れた業績を挙げた研究者に授与されるものです。受賞は、『新規スピロ型不斉配位子 SPRIXs の開発と、二重活性化概念に基づく新しいエナンチオ選択的触媒に関する研究』についてで、「概念的な新規性・独創性を強く意識してエナンチオ選択的な触媒に関する研究を進め、新たな研究領域の開拓につながる成果を挙げた」ことが認められたものです。

受賞式は日本化学会第86春季年会期間中の3月28日(火)に、日本大学理工学部船橋キャンパスで行われました。

市村学術賞貢献賞は学術分野の進展に貢献し、実用化の可能性のある研究に功績のあった研究者に贈呈されるものです。笹井教授の酵素的な作用機序で不斉反応を促進する触媒の開発という概念と、この概念をグリーンケミストリーの観点からも注目される不斉有機触媒で具現化したという二つの点が高く評価され受賞となりました。

受賞式は4月28日(金)ホテル・オークラ(東京)にて行われました。

(産業科学研究所)



西野邦彦特任助手「2006年Invitrogen-Natureバイオテクノロジー賞」受賞

産業科学研究所の西野邦彦特任助手が、2006年 Invitrogen-Nature バイオテクノロジー賞(Young Researcher 分野)を受賞しました。この賞は、Invitrogen 社と科学雑誌 Nature が共同で、「オリジナリティにあふれるテクノロジー。実証済みでありコマーシャル価値のあるもの。また、ライフサイエンスおよび創薬に関連したテクノロジーであり、特に人の健康および環境に関わる研究。」という題材で募集したもので、受賞者の発表、講演が5月18日のBIOEXPOで行われ、主催者である Nature アジアパシフィック CEO David Swinbank 氏と Invitrogen ジャパン代表取締役社長井上理一氏より賞が贈呈されました。

本業績は、薬剤耐性細菌出現予測におけるゲノム情報解析の有用性を証明し、薬剤耐性研究におけるポストゲノム解析を可能にしたものであると高く評価されており、一連の研究成果で、細菌学会黒屋奨学賞(2003年・史上最年少での受賞)、井上研究奨励賞(2006年)、科学雑誌 Science Young Scientist Award(2005年・大阪大学で初めての受賞)も受賞しています。

(産業科学研究所)



西田正吾教授、薦田憲久教授「電気学会電気学術振興賞進歩賞」受賞

電気学会電気学術振興賞進歩賞が、西田正吾大学院基礎工学研究科教授ならびに薦田憲久大学院情報科学研究科教授に授与されました。電気学会の電気学術振興賞進歩賞は、「電気に関する学術・技術において新規な概念・理論・システム・方式等を新たに提案或いはこれらの提案を実証した者」に与えられるもので、それぞれの受賞題目は以下の通りです。

西田正吾教授：地理情報システム向け多次元データ構造の開発と応用展開
(玉田隆史氏・瀬尾和男氏(三菱電機)との共同受賞)

薦田憲久教授：非文法的自由記述データからの有意情報抽出技術の開発
(平松綾子氏(大阪産業大学) 大磯洋明氏(コーデトイズ)との共同受賞)

なお、表彰式は、5月23日(火)に全共連ビルで開催された電気学会通常総会時に行われ、長谷川会長より賞状、賞牌、副賞が贈られました。



(大学院基礎工学研究科・基礎工学部、大学院情報科学研究科)

小林哲郎名誉教授に「IEEEフェロー」称号授与

小林哲郎名誉教授に「IEEE フェロー」の称号が授与されました。

IEEE (The Institute of Electrical and Electronics, Inc.) は、アメリカに本部を持つ電気電子技術の世界最大の学会であり、IEEE フェローはIEEE 会員のうち、関係する分野で特筆すべき業績を挙げたものに与えられる称号です。

小林哲郎名誉教授の、これまでの超高速光エレクトロニクスとエレクトロ-opticsデバイスへの貢献が認められたものです。

なお、贈呈式は5月24日(水)米国カリフォルニア州ロングビーチのロングビーチ・コンベンションセンターで開催されたCLEO/QELS06(レーザー・エレクトロ-optics会議および量子エレクトロニクス・レーザー科学会議)において行われました。プレナリーセッションと合同で行われた贈呈式ではIEEE/LEOS(レーザー・エレクトロ-opticsソサエティ)よりフェローの盾が贈呈されました。



(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

鈴木博善助教授「ISOPE—2006 Best Paper Award」受賞

大学院工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学部門の鈴木博善助教授が The International Society of Offshore and Polar Engineers (ISOPE) (国際海洋極地工学会) の「ISOPE—2006 Best Paper Award (2006 年度最優秀論文賞)」を受賞しました。

ISOPE は、海洋・船舶・沿岸・極地工学に関する世界最大の学会組織の一つです。最優秀論文賞は、前年に開催された Conference の Proceedings および Journal に掲載された論文の中で、特に優れたものに与えられる賞で、毎年 2 名程度の研究者に贈られています。

今回、受賞の対象になった論文は、2005 年 6 月 19 日～24 日、韓国ソウルにて開催された 15th (2005) ISOPE Conference (参加 47 カ国、セッション数：93、論文数：約 630) において発表した「A Numerical Study on Unsteady Flow Around a Mechanical Pectoral Fin」(共著者：加藤直三教授)で、生物模倣型胸鰭推進装置まわりの流れの数値シミュレーション、および、この結果を基にした胸鰭推進装置の推力発生メカニズムの考察に関する研究をまとめたものです。

授賞式は、5 月 31 日(水)、16th ISOPE Conference, Annual Banquet (Grand Hyatt San Francisco Hotel) 席上で行われ、賞牌が授与されました。



(大学院工学研究科・工学部)

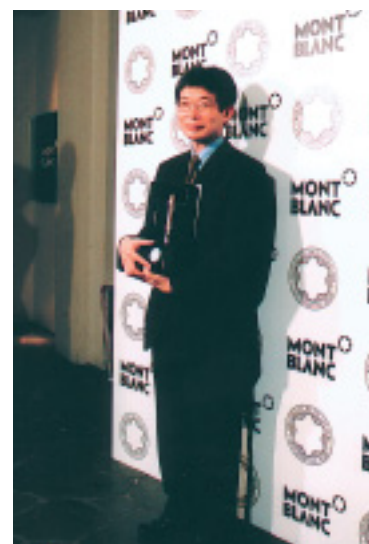
平田オリザ教授「第15回モンブラン国際文化賞」受賞

コミュニケーションデザイン・センターの平田オリザ教授が「第15回モンブラン国際文化賞」(MONTBLANC DE LA CULTURE ARTS PATRONAGE AWARD)を受賞しました。

モンブラン国際文化賞は、1992 年の設立以来、あらゆる芸術の分野において、若い才能の開花に尽力支援している個人に対し、モンブラン文化財団から贈られる文化賞です。受賞者は世界各国(今年度は日本、中国、フランス、ドイツ、香港、イタリア、スペイン、イギリス、アメリカ合衆国)よりそれぞれ 1 名が、各国の文化・芸術分野で活躍している著名人で構成された審査員団による厳正なる投票の結果選出されます。

平田教授は、国内各地でのワークショップによる「演劇とは何か」を主体的に考える場の提供、小中学校での「総合的な学習の時間」やノン・プロフェッショナルを対象とした教育普及プログラムの実施など、演劇の発展に寄与したこと、また様々な合同プロジェクトやワークショップを通しての国際交流等の活動が認められ、この度の受賞となりました。

授賞式は 6 月 8 日(木)に東京・芝浦の「TSUKI CLUB NYX」にて行われ、当日会場ではゲスト・オブ・オナーとして小説家・詩人の辻井 喬氏よりご祝辞をいただきました。



(コミュニケーションデザイン・センター)

折田義正名誉教授「(社)日本腎臓学会第9回(2005年)優秀論文賞」受賞

折田義正名誉教授(医学部病態生体情報学講座)は、(社)日本腎臓学会より第9回(2005年)優秀論文賞を受賞しました。

本賞は(社)日本腎臓学会の機関誌「日本腎臓学会誌」に1年間に掲載された論文中より、優秀論文1編が選考されるものです。今回、折田名誉教授他による「イヌリンクリアランスを用いた糸球体濾過量の評価—クレアチニンクリアランスとの比較—」(日本腎臓学会誌 2005: 47(7) 804 - 812)の論文が選ばれました。

本論文は、我が国における糸球体濾過量の正確な測定法の確立と臨床応用を目指したもので、静脈注射用イヌリン製剤及びイヌリンに特異性が高い測定法を開発し、本法を用いて、本学医学部附属病院等全国12病院において、慢性腎臓病患者116症例のイヌリンクリアランスを検討した結果、クレアチニンクリアランスによる従来法が糸球体濾過量を過大評価し、適切な治療法の適用を遅らせていることを初めて指摘したものです。

本内容は、2004年11月アムステルダムで開催された糸球体濾過量に関する国際会議でも発表されました。

授賞式は、6月14日(水)社日本腎臓学会総会(京王プラザホテル、於：東京)において行われ、同学会理事長より賞状が授与されました。

(大学院医学系研究科・医学部)



田中哲史君、長島一樹君に「第3回マイクロン奨学金」授与

平成16年度から創設された米国マイクロンテクノロジー財団からの奨学寄附金に基づく第3回マイクロン奨学金授与式が、7月3日(月)に基礎工学研究科において、7月4日(火)に工学研究科においてそれぞれ開催されました。

この奨学金は、マイクロエレクトロニクス分野(物理工学、電気工学、化学・生物工学、機械工学、システム工学、コンピューター工学、情報工学など)を専攻する大学院博士前期課程に入学した学生で、優秀な学部学業成績をおさめ、優れたリーダーシップを発揮できる人物を対象に2年間奨学金が授与されます。

両研究科の選考委員会において、奨学生が選考され、授与式当日にはマイクロン・ジャパン社の関係者、両研究科の研究科長、選考委員会委員等の関係教員、奨学生、学部生が出席のもと、奨学金授与式が執り行われました。

両研究科の栄えある第3回奨学金受賞者は、下記の2名で、両研究科長から奨学金証書を、マイクロン社から楯が授与されました。両君の栄誉を称え、今後の活躍を期待いたします。

第3回マイクロン奨学生

- ・大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻
博士前期課程 1年次 田中哲史
- ・大学院基礎工学研究科 物質創成専攻
博士前期課程 1年次 長島一樹

(大学院工学研究科・工学部、大学院基礎工学研究科・基礎工学部)



基礎工学研究科第3回マイクロン奨学生(長島一樹君)を囲んで、マイクロン財団関係者と基礎工学研究科関係者



工学研究科第3回マイクロン奨学生(田中哲史君)を囲んで、マイクロン財団関係者と工学研究科関係者

福岡 秀 和 (基・H6 退官)	平成6年基礎工学部を退官後、奈良工業高等専門学校に6年、豊橋技術科学大学に2年勤めて、41年間の公務員生活を終えました。高専の最後の年に急性心筋梗塞を患いましたが、その後は元気に過ごしています。健康法としては、毎日30分余りの散歩と起床後20分程度のヨガを続けています。現在、大阪にある(財)電子科学研究所に週一回出かけております。ここでは、非破壊検査の技術者に対する教育訓練を行っています。最近、原子力発電所用機器に対して維持基準が適用されるようになったことから、PD 認証制度(技術者、探傷装置、手順書を一括した超音波探傷システムによる欠陥寸法測定能力を総合的に認証する制度)が発足したのに伴い、その研修センターとしての役割を担うことになりました。
中 村 宣一郎 (経・H8 退官)	阪大定年退職後、摂南大学経営情報学部勤務を経て、現在、金沢学院大学大学院経営情報学研究科で主に社会人の方を相手に研究指導に当たっています。年齢74ともなれば当然往事茫々の感是否めず、急激な社会の変化には戸惑いながらも、適度な距離を保ちながら、それを程よい刺激と見立てて元気に生きていけるよう心がけている毎日です。
濱 口 智 尋 (工・H13 退官)	退官してからはや5年が過ぎました。現在も高知工科大学の客員教授とシャープ株式会社の顧問を務めております。執筆した教科書の改訂が主な仕事になりました。2001年に出版した“Basic Semiconductor Physics”(Springer)は2004年に改訂版を出し、日本語のテキストも改訂中です。これらはすべて LaTeX で作成しており、出版社は活字を拾ったり作図する必要はありません。退官後、読書する時間が増えたので愛読していた夏目漱石や藤沢周平の作品を読み直し、ギリシャやローマの歴史物語を楽しんでいます。今年の5、6月にオーストリア、ハンガリー、イタリアを3週間かけて旅行しましたが、本から得た知識が役立ち、これまでとは一味違う旅行を楽しむことが出来ました。毎年ハワイでリゾートライフを楽しんでおり、今年も9月に2週間滞在予定です。
亀 高 惟 倫 (基・H16 退官)	週1日同志社大学非常勤講師。力を入れているのはD3学生の個人指導。昨年7月1日右目眼底出血の手術。3週間見えなかったがすぐ見えるようになった。12日退院。27日出発、カナダで数学研究会。特別セッション「ソボレフ不等式とその応用」をやったが、不発。ロシア語をしゃべる優秀な移住者達が最後までいてくれなかった。帰国後、前年カナダにさそってくれたイスラエルの友人にメール。1月初、イスラエルで「関数論と微分方程式の研究会」をするのでおいでという。若い人達は行かないという。昔の学生1人と家内の3人で行った。さすがに「ソボレフ不等式の最良定数」を理解してくれる人が沢山いてうれしかった。
二 井 将 光 (産・H16 退官)	品川区にあります微生物化学研究センターに製薬会社とJSTの研究支援で二井特別研究室を作ってくださいと仕事をしています。ポスドク3人、テクニシャン3人、学生1人、秘書という小さな世帯です。酸素反応のゆらぎ、細胞内オルガネラ内部pHの機能、破骨細胞の形成といったところで仕事を続けています。 昨年と今年で7つほどの論文を出しました。定年になって、はじめの1年半ほどは全く研究だけの毎日でしたが、だんだんと他のことでも忙しくなってきました。

新部局長紹介

本 多 佑 三 (ほんだ ゆうぞう)

大学院経済学研究科長



【略歴】

- 昭46. 3 早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業
55. 3 Princeton University (U.S.A.) Ph.D.コース卒業

55. 4 兵庫県立神戸商科大学勤務
55. 6 Ph.D. in Economics (Princeton University) 取得
62. 4 神戸大学経営学部助教授
平元.12 同教授
8. 4 大阪大学経済学部教授
10. 4 大阪大学大学院経済学研究科教授
12. 4 大阪大学評議員(平15.3まで)
17. 4 同研究推進室員
18. 4 同金融・保険教育研究センター長
18. 6 同大学院経済学研究科長(平20.6まで)

長 井 英 生 (ながい ひでお)

金融・保険教育研究センター長



【略歴】

- 昭48. 3 京都大学理学部卒業
50. 3 大阪大学大学院理学研究科修士課程修了

51. 9 同大学院理学研究科博士課程退学
51.10 東京都立大学理学部助手
58. 6 理学博士(大阪大学)
61. 4 徳島大学助教授教育学部
61. 4 同助教授総合科学部
平元. 3 名古屋大学助教授教養部
5.10 同助教授情報文化学部
7. 4 大阪大学教授基礎工学部
9. 4 同教授大学院基礎工学研究科
16. 4 同財務・会計室員(平20.3まで)
18. 8 同金融・保険教育研究センター長(H20.7まで)

新教授紹介

上 田 良 夫 (うえだ よしお)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭56. 3 東京大学理学部物理学科卒業
58. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
61. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了
61. 3 理学博士(東京大学)
61. 4 東京大学大学院理学系研究科大学院研究生
61.10 米国プリンストン大学プラズマ物理研究所研究員
62. 9 大阪大学助手工学部附属超高温理工学研究施設
平 8. 5 大阪大学助手工学部
平 8. 6 大阪大学助教授工学部
10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
18. 7 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科電気電子情報工学専攻
攻先進電磁エネルギー工学講座
専門分野：核融合エネルギー、プラズマ材料相互作用

新教授紹介

鎌 田 敏 郎 (かまだ としろう)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭61. 3 東京工業大学工学部土木工学科卒業
- 61. 4 大成建設株式会社土木設計部
- 平 2. 4 東京工業大学助手工学部
- 9. 1 博士(工学)(東京工業大学)
- 9. 4 岐阜大学助教授工学部
- 18. 7 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科地球総合工学専攻社
会基盤工学部門

専門分野：土木材料、維持管理工学、非破壊検査

朝 野 和 典 (ともの かずのり)

医学部附属病院



【略歴】

- 昭59. 3 長崎大学医学部卒業
- 59. 6 医員(研修医)(長崎大学医学部附属病院)
- 63. 4 日本学術振興会 特別研究員
- 平元. 3 長崎大学大学院医学研究科博士課程修了
- 2. 4 自治医科大学附属病院
- 5. 1 長崎大学助手医学部
- 6. 1 医療法人春回会長崎北病院
- 8. 4 長崎大学助手医学部附属病院
- 8. 7 長崎大学助手医学部
- 8.12 長崎大学助手医学部附属病院
- 13.12 長崎大学講師医学部附属病院
- 14. 4 長崎大学助教授医学部附属病院
- 15. 4 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 18. 7 大阪大学教授医学部附属病院

所 属：医学部附属病院感染制御部

専門分野：感染症、感染制御学、呼吸器内科学

中 西 浩 (なかにし ひろし)

学際融合教育研究プラットフォーム



【略歴】

- 昭46. 3 大阪大学工学部電子工学科卒業
- 48. 3 大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了
- 48. 4 日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所
- 63.12 日本電信電話株式会社企業通信システム事業本部
- 平 3. 7 日本電信電話株式会社境界領域研究所
- 5. 4 NTTアイティ株式会社出向
- 18. 6 大阪大学教授学際融合教育研究プラットフォーム

所 属：学際融合教育研究プラットフォーム
専門分野：信号処理、位置決め制御、ストレージ、
センサーおよびネットワーキング

東風西風

教養教育の改革から大学教育の改革へ — 時代が阪大に求めるもの

名誉教授 森 本 益 之



私は、法学研究科博士課程在学中の1968年4月、指導教授瀧川春雄先生の推薦により島根大学に助手として赴任しました。翌69年1月に東大安田講堂事件が起こり、全国の大学は紛争の渦に巻き込まれました。阪大の状況は断片的にしか知り得なかったのですが、紛争の過程で学生部長職にあった瀧川先生と法学部の中武靖夫先生が阪大を去られたことは大きなショックでした。当時の大学紛争とは何であったのか、最近の様変わりしたキャンパスを見るにつけ、自問自答しています。

その後、1990年4月に教養部法学担当教授として阪大に戻る機会を得ました。まもなく、大学審議会答申に基づいて大学設置基準が改正され、一般教育と専門教育の区分や一般教育内の科目区分が廃止されました（1991年7月施行）。いわゆる設置基準の大綱化です。これにより各大学は学部課程の教育を自由に編成できるようになり、教養部の改組・解体が進められました。阪大では教養部の学部化も検討されましたが、結局、教養部を廃止して、教官は学部・大学院に分属させる途が採られました。一般教育は共通教育に再編されて全学の共同担当になり、その実施を担う学内組織として全学共通教育機構が設けられました。初代機構長に任命されたのは、最後の教養部長として金森順次郎総長とともに教養部の発展的解消に尽力された森田敏照副学長でした。私は他の法学・政治学・経済学教官とともに国際公共政策研究科に所属しましたが、森田部長の下で教養部最後の教務委員長を務めた関係から、全学共通教育機構においてリキュラム部長を2期、教務部長を1期務めさせていただきました。阪大にとって全く新しい教育体制を構築する大事業でしたが、金森総長をはじめ後任の岸本忠三総長および歴代機構長の強力な指導のもとに、共通教育機構の役職者・事務局が団結し、全学が協力して、阪大らしい新教育体制を確立できたと思います。

90年代の阪大教育改革を振り返ってみますと、当初は「一般教育」として硬直化していた教養教育の見直しと専門教育の低年次開始が軸になっていたようです。学生は一般教育を高校教育の焼き直しだとし、専門の学部教育を受けたくて入学したのに教養課程に編入されて専門教育に接する機会がほとんどないという不満を持ち、教養部教官にも専門科目の授業やゼミを持ちたいという願望がかなりありましたから、教養部の改組・解体は双方のニーズに沿ったものといえました。また、グローバル化とともに激化した研究面の競争も専門教育の早期導入を促したようです。結果として、教養科目の縮小・専門科目の拡大がもたらされたわけです。

ところが1995年に起きたオウム真理教事件が大きな反省を迫ることになりました。事件関係者の中に大学や大学院修了の高学歴者がいて、その知識・技術が悪用されたからです。そこで宗教教育を含む教養教育の重要性が指摘され、宗教分野の科目が増設され、倫理・情操教育の充実が図られました。さらにごく最近、大学生らによる殺人・準強姦・強要・薬物使用等の犯罪が発生し、関係大学当局が謝罪に追われています。これは従来型の教養教育の範疇を超えて大学教育全体のあり方を問う事態の出現といえます。大学は専門知識の提供を中心とする教育にとどまらず、人間教育の再建を求められているようです。むしろ現在起こっている出来事は大学だけの責任ではなく、家庭・学校・社会のすべてに責任がありますが、多くの「大人になりきれない」若者を受け入れる大学が、彼らの「育て直し教育」を引き受けなければならないように思われます。すなわち、大学は専門教育を行う場であるとする大学教育観を改め、自己中心的で主体性に欠け学修意欲の乏しい若者の実態をふまえた人間性回復教育を行わなければならないでしょう。

私は、わが国の主要大学とされる阪大が今回の不祥事・悲惨事を契機として新たな大学教育像を提示し、教育界をリードする責務を負ったと感じています。偶々、私自身も現在私立大学の学長職を引き受けていますので、今日の大学に求められる新しい大学教育の構築を図る責任を痛感しております。それだけに、阪大に蓄積された豊富な知的資源がこうした時代の要請に応えてくれることを心から期待するものです。

海野 一隆名誉教授(旧教養部)逝去



本学名誉教授海野一隆先生は、去る平成18年5月4日(木)、糖尿病にて入院治療中のところ、逝去されました。享年84歳。

先生は昭和20年9月京都帝国大学文学部を卒業後、岐阜県大垣中学校などでの勤務ののち、昭和23年5月に大阪第二師範学校教員となり、大阪学芸大学講師、助教授をへて、昭和38年4月に大阪大学教養部に助教授として着任されました。担当は人文地理学。昭和46年5月に同教授に昇任され、翌47年以降は大学院文学研究科の講義も

担当されました。昭和60年3月に定年退職されたあと、大阪明浄女子短期大学で平成3年3月まで私学教育に従事され、その後も盛んに研究・執筆活動に励んでおられました。

先生の研究の中心は東洋地理学史で、東アジアの地図史、地図をめぐる東西交渉史についてとくに精力的に推進され、昭和38年には室賀信夫博士との共同研究により、国際地図史学会の賞である「イマゴ・ムンディ賞」を受賞されるほか、昭和54年以降は同学会の日本代表などをつとめ、国内でも東洋文庫の研究員として活動されました。先生は平成15年以降、『東西地図文化交流史研究』・『東洋地理学史研究 日本編』・『東洋地理学史研究 大陸編』と大部のご著書が続けて刊行されて周囲を驚かされましたが、さらに2冊の著書についても刊行の準備をほぼ完了されていました。また『地図の文化史』(平成8年)、『地図に見る日本』(同11年)のような一般向けの著書もあり、前者は中国語に翻訳され、ひろく読まれています。

定年退職後もますます研究を推進され、病に倒れられてもなおその完成に全力を尽くされた海野一隆先生のお姿をしのび、謹んで哀悼の意を表します。

永宮 健夫名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授永宮健夫先生は、平成18年6月3日(土)老衰のため逝去されました。享年96歳。

先生は明治43年6月1日東京都に生まれ、昭和8年3月東京帝国大学理学部物理学科を卒業と同時に、東京帝国大学工学部助手に、昭和10年8月東京高等学校講師嘱託を経て、昭和11年3月同校教授に、昭和14年3月大阪帝国大学理学部助教授に就任、昭和18年3月同教授に、昭和37年6月理学部から基礎工学部へ転じ、昭和47年4月以来同学部長として基礎工学部の発展に尽力し、昭和49年4月1日限りで停年退職し、同年4月大阪大学名誉教授の称号を授与されました。その後も昭和49年4月から昭和54年3月までの間、関西学院大学教授(昭和52年4月から同大学理学部長)、昭和55年4月から平成元年3月までの間、学校法人関西学院理事として、関西学院大学及び学校法人関西学院の発展に尽力されました。

この間、長きにわたりひたすら教育・研究に専念し、専門の

物性物理学分野において国の内外の学界に多大の影響を及ぼし、現在、先生の門下生から学界の指導的人物とされる多数の研究・教育者を輩出されました。

また、大阪大学の運営についても、昭和18年に就任した学生主事事務取扱、昭和37年及び44年の大阪大学評議員をはじめとして多数の委員を歴任し、大阪大学の発展に大きく寄与されました。

学外においても先生は、我が国における物性物理学の研究水準の向上に努力されました。昭和32年東京大学物性研究所の設立に参画し、併任教授としてその発展に尽されました。京都大学基礎物理学研究所の運営についても、昭和29年から長い併任教授の期間を通じて大きく寄与されました。また、物理学研究連絡委員会委員、結晶学研究連絡委員会委員、同幹事を日本学術会議から委嘱され、貢献されました。昭和32年から翌33年の間、日本物理学会委員長として学界に牽引されました。

このように先生は、我が国における物性物理学の研究に、はかりしれない影響を及ぼしました。特に磁性理論の発展における顕著な功績によって、昭和37年に朝日賞(文化賞部門)を、昭和38年に日本学士院恩賜賞を受賞されました。更に、昭和44年には文化勲章受賞者選考委員となる一方、昭和52年には藤原賞を贈られました。また、昭和57年には国家又は公共に対する功労が顕著であると認められ、勲二等旭日重光章を受章されました。

以上のように、先生は、研究者としては卓越した業績を生みだし、教育者としては多数の優秀な後進を育成し、その見識と思慮によって大阪大学はもとより、学界の発展に多大の貢献をし、更には私学振興、科学振興に尽力した功績は誠に顕著でありました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

溝口 宏平教授(大学教育実践センター)逝去



本学教授溝口宏平先生は、病氣療養中のところ、平成18年6月22日(木)肺癌のため逝去されました。享年59歳。

先生は兵庫県に生まれ、昭和45年3月京都大学文学部哲学科をご卒業、修士課程、博士課程を経て、昭和51年4月大阪教育大学教育学部講師にご就任、その後昭和58年4月大阪大学教養部助教授に就任されました。平成5年4月教授に昇任、翌年4月大阪大学文学部教授に配置換えになられ、哲学哲学史講座をご担当、同年5月博士の学位を授与された後、大阪大学大学院文学研究科教授に就任され、現代思想文化学専門分野をご担当になりました。平成16

年4月大学教育実践センター開設と同時に教授に就任され、副センター長・教育実践研究部長をお務めになりました。

先生は西洋現代哲学、とくに20世紀ドイツにおける現象学と解釈学の研究をご専門にされ、ハイデガーに関して多くの優れた研究成果を挙げられました。加えて比較思想的見地からした西田哲学に関する研究は、歴史意識や無の概念をめぐって、東西思想の対話の地平を開くものとなりました。さらに最近の環境倫理学に関するご論考は中国語に翻訳されて(共著『新世紀価値観——中日学者論文集——』)、国際学術交流にも寄与されました。また学会活動においては、日本倫理学会評議員、関西哲学会委員、関西倫理学会委員等を歴任されました。

近年の大学改革における先生の貢献は特筆に値するものでした。平成12年度に着手された大学評価に際しては、全学テーマ別評価「教養教育」自己評価書作成責任者として中心的役割を担い、全学共通教育における授業評価システムの構築にも力を注がれました。また大阪府内学長会・高校との交流を図る専門部会幹事を務めるなど、高大連携活動においてもご活躍になりました。

以上のように、哲学・倫理学の研究者としてのみならず大学人として学問と大学の発展に大きく貢献されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

竹本 喜一名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授竹本喜一先生は、平成18年7月3日心不全のため逝去されました。享年76歳。

先生は昭和5年2月14日大阪府に生まれ、昭和28年大阪大学工学部応用化学科(旧制)を卒業、同年4月大阪市立大学理工学部助手に採用、同工学部助手、講師を経て、昭和39年4月助教授に昇任されました。その間昭和36年にはフンボルト財団給費生としてドイツのシュツットガルト大学に留学されました。昭和44年4月大阪大学工学部教授に就任され、石油化学第六講座(昭和58年4月、応用精密化学科機能高分子化学講座に改称)を担当されました。平成5年3月大阪大学を停年退官、大阪大学名誉教授の称号を授与され、同年4月龍谷大学理工学部教授に就任されました。平成12年5

月龍谷大学エクステンションセンターの初代フェローに就任され、平成15年3月同センター退職後は産官学連携ベンチャー企業の顧問を務めておられました。

先生のご専門は、応用化学のなかの高分子化学、特に機能性高分子の先駆的な研究者として長年にわたり活躍され、基礎にとどまらず常に応用も視野に入れて、研究室を率いてこられました。なかでも、核酸やタンパク質などの生体物質にヒントを得た、人工核酸高分子や包接化合物の研究は世界に知られ、日本化学会賞や高分子科学功績賞を授与されています。各種国際会議の組織委員、国際誌の編集委員、社団法人高分子学会関西支部長、社団法人近畿化学協会ビニル部会長、同材料部会長などを歴任されました。

中国、台湾、韓国、タイ、イラン、スリランカなど各国から留学生を受け入れるとともに、アジア各国の大学で招聘教授として多くの招待講演や集中講義を行い、国際交流に尽くされてきました。特に、同窓生との縁で深まった中国との心暖まる交流は忘れがたいものです。原稿を書かれる速さは群を抜いていましたが、その合間に「夢の新素材・機能性高分子」や「生物をまねた新素材」などの一般人向けの本も書かれ、若人に研究の面白さを伝えてこられました。若いときから語学と旅行がお好きで、ドイツ語と英語とを同じように話し、世界の鉄道を楽しみ、多数の写真を撮られ、現地の自然や文化の素晴らしさを学生に熱っぽく語っておられました。

機能性高分子の教育研究に全力を尽くし、東奔西走された先生のお姿を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

グローニンゲン大学との学術交流セミナーについて

本学との大学間交流協定校であり、グローニンゲン教育研究センターを中心とした密接な交流を行っているオランダ・グローニンゲン大学から、学長、国際交流担当理事や部局長を中心として、派遣団が10月2日(月)・3日(火)に本学を訪れます。大阪大学とグローニンゲン大学の学術交流をより促進し、今後の交流の発展に向けての意見交換・検討が行われます。

10月2日(月)には特に、「大阪－グローニンゲン・日蘭交流の将来」というテーマで広く大阪－オランダの文化、研究、教育、経済交流についてのパネル会議が一般公開として行われます。

10月3日(火)には、グローニンゲン大学への交換・研究留学の紹介とグローニンゲン大学の先生方との意見交換が行われます。

みなさまのご参加をお待ちしております。

開催期間：2006年10月2日(月)～3日(火)

開催場所：大阪大学中之島センター、コンベンションセンター、
共通教育講義棟A棟104号室 他

プログラム：(1)10月2日(午前)：学長、理事、部局長レベルでの意見交換(中之島センター)

(2)10月2日(午後)：「大阪－グローニンゲン・日蘭交流の将来について」をテーマとしたパネル会議
(中之島センター)【一般公開】

(3)10月3日(午前)：医学・生物系/理工系/人文系の3分野別の個別面談(吹田地区、豊中地区)

(4)10月3日(午後)：交流実績の発表・討論(吹田地区コンベンションセンター)

阪大在学生を対象としたグローニンゲン大学への交換留学・研究留学の紹介、意見交換
(共通教育講義棟A棟104号室)【一般公開】

実行委員長：橋本日出男(理事・国際交流推進本部長)

主催：大阪大学、グローニンゲン大学

問い合わせ先：研究推進・国際部国際交流課国際交流推進係(内線7038)

kokusai@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp

(研究推進・国際部国際交流課)



平成17年度 入構・駐車整理業務収支決算について

このことについて、次のとおり監査委員から大阪大学施設マネジメント委員会に対し報告が行われ、承認されました。
なお、差引残高については、平成18年度に繰り越すこととなりました。

単位：円

収 入		支 出	
前年度繰越高	46,348,626	業務委託料	88,952,435
小 計	46,348,626	小 計	88,952,435
当期の収入		物件費	
事前申請分	94,998,600	消耗品費	842,636
当日申請分	27,671,300	修繕費	269,415
預金利息	811	印刷製本費	2,121,667
雑収入	215	小 計	3,233,718
小 計	122,670,926	その他	
		寄附金	46,347,786
合 計	169,019,552	料金返却料	1,322,900
		振込手数料	154,455
		雑 費	80,000
		小 計	47,905,141
		合 計	140,091,294
		収支差引	28,928,258

(総務部総務課)

第22回湯川記念講演会

日 時：2006年9月30日(土)13:00 - 17:00

場 所：大阪大学中之島センター 10 階 佐治敬三メモリアルホール

対 象：高校生以上の学生及び一般の方々

定 員：先着 190 名

受講料：無料

主 催：大阪大学湯川記念室 共 催：日本物理学会大阪支部

協 賛：日本物理教育学会近畿支部

高校生、一般の方を対象に、最前線の物理を紹介します。

13:00 - 14:30 「加速器で探る素粒子・宇宙・物質・生命」 永宮 正治 (J-PARC センター長)

15:00 - 16:30 「物理学の目で世界を眺める」 菊池 誠 (大阪大学サイバーメディアセンター教授)

申込方法：郵便、E-mail または FAX で。ご連絡及びアンケートのため氏名、住所、電話番号、年齢、性別、職業をお知らせ下さい。電話によるお申し込みは不可とさせていただきます。定員に余裕のある場合は、当日会場でも受け付けます。

E-mail: yukawa1@het.phys.sci.osaka-u.ac.jp (件名は「2006.9.30 参加申込」をお願いします。)

FAX: 06 - 6850 - 5379

〒560 - 0043 豊中市待兼山町 1 - 1 大阪大学大学院理学研究科内 湯川記念講演会係

電話：06 - 6850 - 5727 (月～金 10:00 ~ 13:00, 14:30 ~ 17:00)

大阪大学湯川記念室ホームページ <http://www-yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp>



(湯川記念室)

最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2006

日 時：平成 18 年 10 月 21 日、28 日、11 月 4 日、11 日、18 日、25 日(土) 午後 3 時 - 6 時

場 所：大阪大学基礎工学部シグマホール (豊中キャンパス)

主 催：大阪大学湯川記念室

共 催：大阪大学理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、大学教育実践センター

後 援：大阪府教育委員会、兵庫県教育委員会、奈良県教育委員会、京都府教育委員会、京都市教育委員会、読売新聞大阪本社

最先端の物理をあなたに！ 今年も開催します！

最新の自然像を知ってほしい。そのような願いを含め土曜午後の物理、宇宙から極微の世界までを開催します。内容ゆたかな、とても楽しい学校を目指します。好奇心を失っていないことが参加資格です。あなたを知的興奮と刺激の世界に招待します。

【授業の構成】

授業は毎回 3 時間で、つぎの三部構成で行います。

- ・基幹講義：自然界の様々な世界を訪ねます
- ・コーヒープレイク：展示、交流、Q & A
- ・実践講義：ハイテクにおける物理、ゲーム、クイズ

6 回の授業のうち 1 回は最先端研究施設見学をします。

基幹講義の内容 ・自然界の基本の力、法則を観る ・宇宙への旅立ち ・量子と統計の世界への旅立ち
・分子の世界への旅立ち ・原子核、素粒子の世界への旅立ち

【募集対象】 高校生 【募集人数】 160 名 【参加費】 無 料

【申し込み】 事前申し込みが必要です。郵便・FAX・E-mail 又は Web サイトでの申し込みが可能です。(詳しくはホームページをご覧ください。) 【申し込み締め切り】 9 月 15 日(金)必着

<問い合わせ先> 大阪大学理学研究科内 湯川記念室 (〒560 - 0043 豊中市待兼山町 1 - 1)

FAX : 06 - 6850 - 5379 E-mail : sap2006 @ phys.sci.osaka-u.ac.jp

ホームページ <http://www-yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/sap/>

(湯川記念室)



第38回 大阪大学中之島講座の実施について

今年度の公開講座「中之島講座」を、下記のとおり開催いたします。

1. 趣 旨

この公開講座は、現代の科学・技術の急速な発展、政治・経済の激しい変化や生活様式の変容の中で、大学の研究成果を広く一般市民・学生の皆様に開放し、生活・職業上の必要な知識の普及と一般教養の向上に資するために企画されたものです。

2. 主 題・講義内容、講義日時、講義題目及び講師

主題A)「嗜好品の文化と科学(文化)」

生きていくうえに必要なものではないのに、人間はさまざまな「嗜好品」を見出しては、それを積極的に商品化し、消費してきました。そして、その魅力を楽しむばかりではなく、ときとして、その魔力にとらわれてしまうこともあり、「嗜好品」と私たちとの関係は一筋縄では捉えきれないほど複雑です。

「嗜好品の文化と科学(文化)」では、お酒やタバコなどの文化史を、文学や絵画や歴史資料をとおして捉え、さらに、「やめられない」、「つい手が出てしまう」という嗜好品特有の消費行動や税金の問題、そして、焼酎がもたらす国際通商摩擦など、「嗜好品」と社会とのかかわりを、幅広い視野から考えていきます。

講 義 日 時	区分	講 義 題 目	講 師
10月10日(火) 午後6時30分～8時30分	1	南蛮ファッションとしての煙草	総合学術博物館・教授 泉 万 里
10月12日(木) 午後6時30分～8時30分	2	焼酎をめぐる国際通商摩擦	国際公共政策研究科・講師 内 記 香 子
10月17日(火) 午後6時30分～8時30分	3	出島三学者が見た江戸時代日本人の嗜好品	言語文化研究科・教授 中 直 一
10月19日(木) 午後6時30分～8時30分	4	中毒の経済学	社会経済研究所・教授 池 田 新 介
10月24日(火) 午後6時30分～8時30分	5	アメリカ文学とアルコール	文学研究科・教授 森 岡 裕 一
11月2日(木) 午後6時30分～8時30分	6	嗜好品と自己決定と税金	高等司法研究科・教授 谷 口 勢 津 夫

主題B)「嗜好品の文化と科学(科学)」

お茶、お酒、タバコ、サプリメントといった嗜好品はある意味で好まれて摂られて来ましたが、物質である以上人の体にとって分子として何らかの影響を与えることになります。この作用について、なぜ好まれるのか、また、好むポイントになる香りに始まり、虫歯、胃潰瘍、がんといった様々な病気に対する良い影響、悪い影響など、それぞれの嗜好品の功罪に到るまで、最近の研究内容をふまえて紹介したいと思います。

講 義 日 時	区分	講 義 題 目	講 師
10月26日(木) 午後6時30分～8時30分	1	お茶のむし歯予防作用	歯学研究科・教授 大 嶋 隆
10月31日(火) 午後6時30分～8時30分	2	おいしさを求める脳のしくみ	人間科学研究科・教授 山 本 隆
11月9日(木) 午後6時30分～8時30分	3	喫煙と健康	医学系研究科・教授 川 野 淳
11月14日(火) 午後6時30分～8時30分	4	香りの化学と生物学	理学研究科・教授 村 田 道 雄
11月16日(木) 午後6時30分～8時30分	5	嗜好品が有する多彩な生理作用	薬学研究科・教授 八 木 清 仁
11月21日(火) 午後6時30分～8時30分	6	嗜好品と消化器疾患	医学系研究科・講師 辻 晋 吾
11月28日(火) 午後6時30分～8時30分	7	生活習慣病における補完医療が果たす役割	医学系研究科・寄附講座教授 伊 藤 壽 記

3. 場 所

大阪大学中之島センター 7 階 講義室 2

大阪市北区中之島 4-3-53

TEL 06 (6444) 2100 URL <http://www.onc.osaka-u.ac.jp>



4. 対象者及び定員

一般市民・学生 各主題別定員 80 名 先着順

定員になり次第、締切させていただきますので、ご了承ください。

5. 講習料（消費税を含む。）

・1 セット（1 主題・A 又は B）だけを選択して受講する場合 7,200 円

・2 セット（2 主題・A と B）全てを選択して受講する場合 10,200 円

受付期間中に受講取消のお申し出があった場合は、所定の手続きにより、後日、講習料相当額をご返金いたします。但し、返還手続きに要する振込手数料については、ご本人様負担とさせていただきますので、あらかじめご了承ください。

なお、受付期間終了後に受講取消のお申し出をされた場合は、キャンセル料として徴収させていただきますので、あらかじめご了承ください。

6. 受講証書

各主題において、5 回以上出席された方には、受講証書を 1 枚授与いたします。

7. 申込方法

下記受付期間中に所定の「受講申込書」に必要事項をご記入のうえ、郵送またはファクシミリで送付願います。受講申込書の記載事項を確認したうえで、折り返し受講決定通知の連絡を電話もしくは E メールにて行います。受講決定の連絡を受けた方は、期日までに講習料を次の指定振込銀行口座へ受講者の御氏名で振込み願います。なお、振込みによる手数料等につきましては、受講者負担とさせていただきますので、ご了承ください。

口 座 名：三菱東京 U F J 銀行 茨木支店 普通預金 1289484

口座名義：大阪大学研究推進課

○受付期間：

主題 A)「嗜好品の文化と科学（文化）」

9 月 20 日（水）～ 9 月 27 日（水）必着（但し、土・日・祝祭日を除く平日のみ）

主題 B)「嗜好品の文化と科学（科学）」

10 月 10 日（火）～ 10 月 17 日（火）必着（但し、土・日・祝祭日を除く平日のみ）

受講申込みについて、各主題別に受付期間を設けますが、あらかじめ 2 セット（2 主題）受講希望される方は、優先して事前に受付いたしますので、受講申込書を送付される際、希望される主題（A と B）の 2 つに○印を付してください。

8. お問い合わせ及びお申し込み先

〒565-0871 吹田市山田丘 1 番 1 号

大阪大学研究推進・国際部研究推進課 中之島講座担当宛

TEL 06 (6879) 7034 FAX 06 (6879) 7039

E - mail : kenkyusuisinkikaku@ns.jim.osaka-u.ac.jp

詳しくは、大阪大学研究協力情報ホームページ（<http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp>）をご参照ください。

9. その他

講義資料等の配付は、各回の講義当日の受付時において、お渡しする予定です。

（研究推進・国際部研究推進課）

平成18年度大阪大学大学院薬学研究科公開講座 『くすりと医療』

目 的 薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識が益々必要とされています。本講座では基礎から臨床まで最新の知見をもとに、現在の課題と将来への展望について、それぞれ最先端の分野で活躍する研究者、臨床医が講述します。

日 時 平成18年11月11日(土) 11月25日(土)

会 場 大阪大学大学院薬学研究科2号館4階 特別講義室
(大阪大学吹田キャンパス内)

主 催 大阪大学大学院薬学研究科

●演題及び講師●

11月11日(土)

13:00 ~ 14:30 『核酸分子とくすり』

(大阪大学大学院薬学研究科) 小比賀 聡

14:40 ~ 16:10 『神経系による免疫系の制御機構：
知覚神経伝達物質は炎症・アレルギー反応を調節する』

(大阪大学大学院薬学研究科) 辻川 和文

16:20 ~ 17:50 『中枢神経の再生』

11月25日(土)

(大阪大学大学院医学系研究科) 稲垣 忍

13:00 ~ 14:30 『がん医療における薬物治療』

(大阪大学大学院医学系研究科) 尾路 祐介

14:40 ~ 16:10 『移植医療における薬物治療』

(大阪大学大学院医学系研究科) 福嶋 教偉

16:20 ~ 17:50 『脂質酸化物によって誘導される細胞の防御機構』

(同志社大学工学部) 野口 範子

定 員 120名(先着順)

参 加 者 本講座は大阪大学に限らず広く薬学部卒業生、薬剤師(開局、勤務を問わない)、製薬企業勤務者等、薬に関する基礎知識を有する人々が対象ですが、一般の方でも本講座に関心のある方の参加を歓迎します。
なお、本講座は日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度対象講座及び大阪府病院薬剤師会(OHP)生涯研修制度認定対象講座です。

受 講 料 6,200円(申し込み後は、受講料の返還はできません)

申 込 期 間 10月2日(月) ~ 10月31日(火)(定員に達し次第締め切ります)

申 込 方 法 受講料を下記の銀行口座に振り込み後、「納付証明書(銀行の窓口より口座振込する場合)」又は「ご利用明細(ATMより口座振込する場合)」と「受講申込書」を併せて、下記送付先へ郵送ください。

「納付証明書」又は「ご利用明細」はコピーで結構です。

現金持参又は現金書留でのお取り扱いはできません。

振 込 口 座 三菱東京UFJ銀行 茨木支店

普通預金 口座番号:1297750

口座名義:大阪大学薬学部(オオサカダイガク ヤクガクブ)

ATMを利用される場合は(コクリツダイガクオオサカヤクガク)と表示されます。

**問い合わせ
及び書類送付先** 大阪大学薬学研究科庶務係 TEL 06 - 6879 - 8144(直通) 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1 - 6

(大学院薬学研究科・薬学部)

(公 告)

2006 年 7 月 10 日

学生のみなさんへ

去る 7 月 7 日、本学学生が、母親を殺害した容疑で逮捕されました。これが事実であるならば、先般、本学学生に「強要罪」の判決を下された事件に続く「不祥事」です。他者の生命を脅かす、あるいは破壊するこのような凶悪な事件を本学の学生が犯したことに、深い悲しみをおぼえます。同じこの大阪大学に集う多くの学生諸君もまた、これらの事件に大きな衝撃を受けていないはずはありません。

この二つの事件は、原因や背景は大きく異なるものの、他者の存在に危害を加えたという点で「人」として許されない行為です。事実関係はいま、警察や本学関係学部がそれぞれに詳しく調査をしているところです。この事件については、おそらくは当該学生が育ってきた家族内の事情、当該学生が受けてきた教育のあり方、当該学生を取り巻く社会のあり方など複雑な問題が絡んでいて、どのような経緯でこのような事件が起こったのかを確定するのは、容易なことではないでしょう。みなさんも、ちょっとしたボタンの掛け違えで、こうした事件に遭遇する可能性があったかもしれません。

しかし、このたびの「凶行」はほんとうに避けることのできないものだったのでしょうか。だれもが多かれ少なかれ襲われている「塞がり」や「苛立ち」や「苦しみ」が、このような形でしか解決できなかったとは、到底思えません。

大学というところは、まずは高度な専門的知識を習得するためにあります。が、それと同時に、家庭や地域社会を超えて、「人類社会」全体へと自分の視野を広げるための学習をするところでもあります。自分たちが直面している「問題」を、さらに広い視野のなかで捉えかえすためにこそ、大学での学習はあります。母親の殺害という、取り返しのつかない行為に及んだ学生には、もしこの「凶行」の理由が自身の「塞ぎ」や「苛立ち」や「苦しみ」にあるならば、それらをもっと広い視野から捉えなおす努力をこそ、してほしかったと思います。大阪大学の教育課程がそれに対して無力であったことに、強い悲しみと深い反省を禁じえません。

今回の事件に衝撃を受けているであろうみなさんに強く望みたいのは、それぞれが直面しているであろう「苦境」を衝動的に「暴力」によって解決するのではなく、その「苦境」をもっと別の広い視野のなかで捉えなおすということです。これしかないと思っている「解決」は、たいていは思い詰めたなかでの、性急な狭い考えでしかありません。家族内のトラブルも、ほんとうは家族の内部事情だけを斟酌して済むような問題ではないのです。もっと大きな文化や社会のあり方のなかに深く根を張っている問題です。そのようにして個人的な問題をより広い視野から捉えなおし、生き方のさまざまな可能性を知るためにこそ、大学での学習はあります。また、「問題」を独りで抱え込まずに、友人に、教員に、学生生活相談室の職員に気軽に相談にのってもらうことも大切です。大学という場所では、「わたしの存在こそ社会問題である」と堂々と言っているのです。ではその社会問題をどのように解決するのか、それを学ぶのが大学ということです。

そのためには専門の学習に閉じこもるのではなく、みずからの視野を広げるために、本学の学部・大学院が開いているさまざまな教育のプログラムを本気で受けていただきたいと思います。また教員の方々にも、それらの教育プログラムに本気で取り組んでいただきたいと思います。この悲惨な事件を機に、大学で学ぶということの意味を、学生・教職員がこぞって、根本から考えなおすことを強く望みます。

大阪大学副学長（教育担当）
鷲田 清一

夢をのせて 飛べ albatross !!

鳥人間サークル albatross (アルバトロス) 代表

小野寺 秀 利



「なぜ阪大は出ていないの？」こんな疑問から有志が集い、昨年9月にサークルが結成されました。全国の大学等から情熱を傾けた面々が琵琶湖の湖面に汗と涙を流す、今年で第30回の記念大会となる「鳥人間コンテスト」に初めて本学学生が参加します。全国から1000を超える応募があり、その中から厳しい書面審査を経て、その機体を羽ばたかせることのできる団体はわずか。すべて一から始め、独学で勉強を続けたメンバーの努力が報われました。一つの目標に向かって夢を描き、チームワークで機体を完成させた、わずか3名からスタートしたサークルも現在は13名に、そんな熱い面々に話を聞きました。

■ なぜ鳥人間サークルを？

「鳥人間コンテスト」はテレビ番組のひとつですが、今や全国的なイベントとなっており、全国の大学などが競い合って、毎年技術の向上を目指し、各大学の名前を全国的にアピールする絶好の機会となっています。また上位常連校などは、「鳥人間コンテストに出たいから」という入学希望動機にも挙げられていると聞きます。

大阪大学は、工学部、基礎工学部など理工系に多数の学生がいるにも関わらず、なぜこれまで声があがらなかったのだろうと友人達と話をしていました。個人的に何度かサークル化を試みた先輩方もおられるようなのですが、メンバーが集まらない等の理由でうまくいかず、結局他大学のサークルに入れてもらい、そこで活動しておられたそうです。

今年は、コンテストも30回の記念大会であり、是非出場したいと話が盛り上がり、最初は3人のメンバーで活動を開始しました。

■ 工学系の血が騒いだ！？

とにかく基本的な知識さえも全くないので、文系、理工系などは関係なく、「どうやったら飛ぶんだろう」と言うところから話し合いを始め、設計図の書き方から勉強し、とにかくまず応募し、採択されないと話にならないので、



細かい作業はメンバーで手分けして進めます。



今年のいちょう祭でも出場決定をアピールしました。

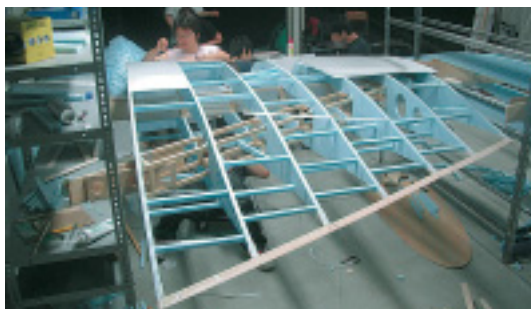


工学部の車庫を借りて作業をすることができました。

いかに審査員にアピールできるかを考えながら設計しました。出場決定の知らせを受けたときは、まず第一関門突破ということで、ほっとしました。

■ どのクラスに応募？

コンテストは、「滑空機部門」と「人力プロペラ機部門」があります。今年は30回の記念大会と言うことで、特別に設けられた「滑空機部門」の中の「フォーミュラクラス」にエントリーしました。これは機体の横幅が12mと言う制限があります。このクラスには、部門で28チーム中12チームがエントリーしており、そのうち阪大を含め4チームが初出場です。



製作作業の様子（夜を徹することもしばしば）

■ 今後の抱負

今年の目標は、大きく 100m。とにかく初めての参加なので、来年につながる飛行ができればいいと思っています。

大阪大学でも鳥人間コンテストに取り組んでいるんだとアピールし、部員を増やし、アルバトロスが大きく羽ばたくことを願っています。（次の部室を探さないとい!!）

<コメント>

すべて一からスタートした素人の学生達が、独学で目標に向かって一生懸命機体を作り上げていく作業は大変貴重な経験だと思えます。いつまでも、大阪大学と仲間を胸に刻む、まさに今しかできない体験だと思っています。



アルバトロス HP : <http://www15.ocn.ne.jp/albatros/index.html>

■ 苦労した点 - ようやく完成へ

出場は決まったものの、まずどうやって作ろうか、場所はどう確保するのか、部員はどうやって集めようか、問題は山積していました。幸いにもいちょう祭などを利用して部員を勧誘し、総勢 13 名のメンバーが揃いました。場所については、工学部に相談に行くと、7 月末までの約束で車庫を快く貸していただくことができました。この場所が確保できたことが、製作する上で大変助かりました。

作業は、まず設計図を元に模型を作り、メンバー全員でイメージ作り。

みんなで手分けして情報収集、材料などは他チームの情報などを集め、買い出しに行き、工具なども手作りし、製作にとりかかりました。

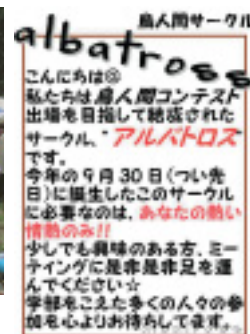
メンバーは、まだ 1, 2 回生が多いので豊中で授業を受けた後に、連絡バスに乗って吹田へ移動。時間の都合のつくメンバーで少しずつ作業を進めました。

あとは天候です。今年は梅雨の長雨で、室内も水浸しになることが多く、特に機体は木材でできているので、湿気で変形し、その都度やり直し、また、完成に近づくにつれ機体が大きいの、部屋に入りきらず、接続部分の強度には特に気を使いました。それだけに完成したときは大感激でした。

来年以降は、真面目に「流体力学」などの授業も受け、専門的知識も蓄えて挑みたいと思っています。また工学部や基礎工学部の先生にも積極的に意見を伺い、さらにグレードアップした機体の製作に取りかかりたいと思っています。



力を結集し、ようやく完成!!



メルボルン滞在記

～ 短期語学研修を受講して～

医学系研究科総務課庶務係 魚井 慶太



平成 17 年 12 月 31 日から平成 18 年 3 月 13 日までの 3 ヶ月弱の間、オーストラリアのヴィクトリア州メルボルンにあります Monash University English Language Centre（モナシュ大学付属語学学校）において、短期語学研修を受講する機会をいただきました。簡単ではございますが、滞在記を紹介させていただきます。

■ メルボルン

メルボルンはオーストラリア大陸南東部、ポート・フィリップ湾に面したヴィクトリア州の州都で最大の都市。その人口は 337 万人（2001 年現在）で、シドニーに次ぐオーストラリア第二の規模の都市です。近代的なビルが建ち並びシドニーと比べると、歴史を感じさせる建物が多く、古都の雰囲気を感じることができます。世界的なスポーツイベントが数多く開催されることでも有名で、「全豪オープンテニス」「F1 グランプリ」は毎年メルボルンで開催されています。また 1956 年の最初の南半球開催の夏季オリンピック大会、記憶に新しいところでは今年の体操世界選手権などもメルボルンで開催されました。



メルボルン市内の中心部にある Flinders Street Station。市内の観光スポットへの出発駅になります。

■ モナシュ大学

モナシュ大学はオーストラリアで最も国際化されている大学のうちの高校とされています。モナシュ大学は全部で 8 つのキャンパスを有しており、そのうち 1 つはマレーシアに、そしてもう 1 つが南アフリカにあります。また、その他支部がイギリス、イタリアにあります。総数 4 万人以上の学生が在籍しており、10,000 名を超える留学生が世界 100 カ国を超える国から集まっています。

モナシュ大学はオーストラリアで名声のある 8 校の大学が集まるグループとして知られる、グループ・オブ・エイトに加盟している大学のうちの高校です。グループ・オブ・エイトはオーストラリアの大学で行われている研究活動のうちの 70%を行っており、オーストラリアで行われている基礎研究のうちの半分以上がこれらの大学によるものだといわれています。全部で 10 の学部があり、具体的には芸術・デザイン、ビジネス・経済学、教育学、技術工学、情報技術、法律学、薬学、医療・看護・健康科学、科学、人文科学といった学部があり、それぞれの学部で幅広い種

類のコースが提供されています。

私の通った English Language Centre のある Clayton キャンパスはメルボルン市の中心部から電車で約 30 分、タクシーで約 20 分に位置しています。キャンパスの広さは正確にはわかりませんが、吹田キャンパスの 3 倍くらいだと思います。私は通学に公共バスを使用していたのですが、バス停はキャンパスの南端にあり、授業の行われる English Language Centre は北端にあったため、バス停から教室まで毎日 20 分強を歩く羽目となりました。English Language Centre の学生は本部の学生と同様に扱われ、スポーツ施設、コンピューターラボ、図書館、保健センターなどの大学施設で様々なサービスを楽しむことができました。



メルボルン市内道端の風景

■ 授業内容

前半期は主に日常会話の習得、オーストラリアの文化・風習等を学習することを目的としているクラスに配属されました。このクラスでは、テキストを用いた Reading の授業、課題に沿った自由作文による Writing の授業、フリートーキングやロールプレイングによる Conversation の授業、テープや映像教材を用いた Listening などの授業が行われました。また、これらとは別に、クラスメートに向けての Oral Presentation などの課題もありました。各技能の習得状況チェックのため、アセスメントが頻繁に行われる点も特筆すべき点でした。週に 2～3 回、このアセスメントは実施され、各生徒の学習進捗度のチェックや上級クラスへ

の昇級試験の性格も兼ねたものでありました。当初は授業内容を把握することにすら困難を生じておりましたが、学習を進めるうちに徐々にそれも改善されていきました。クラスメートのほとんどは当地において学位取得を計画している者であり、当期に編成された一般英語のクラスの中では最上級の、主に日常生活における様々なシチュエーションに対応しうる能力の涵養を目的としたクラスでした。

後半期は一般英語の最上級クラスに配属され、授業内容には、国際紛争問題、文学などアカデミックな内容が盛り込まれていました。特にオーラルによる意思表示能力の養成を重視した授業内容であり、毎週のプレゼンテーションが義務付けられておりました。私が行ったプレゼンテーションの題目は「日本社会の少子高齢化問題」「北朝鮮による日本人拉致疑惑」「竹島領有問題」であり、このプレゼンテーションを基に、韓国、中国からの留学生と討論を行ったことは良い思い出となりました。

また、週の後半はビジネス英語の授業が割り当てられ、ビジネス文書の読解、ケーススタディなどを行いました。ここでもオーラルによる意思表示が重視され、グループ討論などによりその能力の涵養に注力しました。クラスの大半は豪州においての学位取得を目的としたメンバーで構成されており、各々の専攻分野を生徒が講師役となり、授業形式で行うこともありました。筆者も講師役として教壇に立ち、日本の少子高齢化問題などについて模擬授業をする機会に恵まれました。思いのほか聴衆から多くの質問を得られ好感触を得ることができました。



授業の行われる Normanby House。1 階が事務室・教室で 2 階より上が学生寮になっている。



クラスメートと学生街にて（中央が筆者）

■ メルボルンでの生活

今回の研修においては大学への授業申込み、ビザの申請、航空券の購入、現地住居の確保などの手続きを全て自分で行う必要がありました。自分の学生時代は海外との通信手段はもっぱら電話、手紙を使っていましたが、現在はほとんどの申込みがオンラインでできるので大変助かりました。現地住居の選択肢としては、現地家庭へのホームステイ、大学の学寮、普通の賃貸アパートなどがあったのですが、結局普通の賃貸アパートを選択しました。家具、布団、什器などを揃えなければならない不便さはあるものの、何よりも私を惹きつけたのは「オーストラリアでしか買えない食材を使って料理をしてみたかった」からです。実際、毎晩のように厨房に入ることとなり、クラスメートと一緒に日本料理や各国料理を作ったり楽しい時間を過ごすことができました。特にカンガルー肉、クロコダイル肉を使ったカレーの味は生涯忘れ得ぬものとなりました。ちなみに留学生のほとんどがホームステイか大学の学寮を利用しており、私のような民間アパートを賃貸するというケースは非常に稀なようです。

アパートはキャンパスからバスで30分～35分のところにあり、毎朝現地の小中学生と一緒にバス通学をしました。大学からの帰り道には大型スーパーで買い物をするのが毎日の楽しみでした。物価は肉、野菜、果物などの生鮮食品は日本よりおおよそ2～3割安。加工食品、菓子類、清涼飲料水などは日本より2～3割高、そしてたばこは日本の



エアーズロックの頂きで撮影しました。影になって写っているのが筆者

3倍以上！というところでしょうか。ちなみにビールは日本と同程度の値段でした。

■ オフキャンパスにて

前出の通り、メルボルンは大きなスポーツイベントが数多く開かれるスポーツ好きな方にはおすすめの都市です。滞在期間中には世界最高峰のテニス大会の一つに数えられる「全豪オープンテニス」が開催され、街中がテニス一色に染まるほどの熱狂ぶりでした。スポーツが盛んなお国柄らしくその他にもクリケット、オーストラリアンフットボール、水泳、サッカー、ラグビー、競馬、ドッグレース



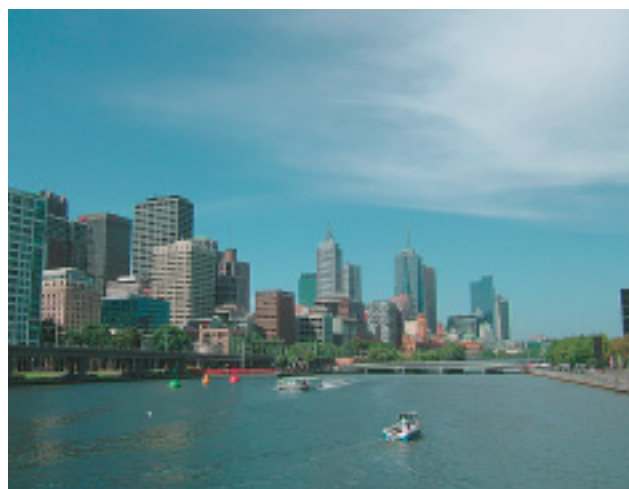
全豪オープンテニスは毎年1月中旬より2週間、メルボルンにて開催されます。

などが毎日のように行われています。放課後に留学生仲間
でこれらのスポーツ観戦に出かけることも大きな楽しみの
ひとつでした。

オーストラリアといえばカンガルーというイメージをお
持ちの方も多いでしょうが、想像したよりも簡単に野生の
カンガルーなどに出会えたことに驚きました。メルボルン
から郊外に1時間ほど車で走ったとき、ふと道路横のゴル
フ場に目をやるとグリーン上に大小あわせて5匹ほどのカ
ンガルーが居たのです。一見すると人間のように見えて（カ
ンガルーたちは二本足で立っていた）なんだか可笑しくて、
皆で大笑いしました。



野生のコアラ、しかも親子に遭遇しました。



メルボルン市内を流れるヤラ川

■ 最後に

まさかこの年齢になって海外留学を経験できるなど思っ
てもいませんでした。これまでになく密度の濃い時間を過
ごさせていただき、身に余る光栄であります。今後はこの
研修の経験を存分に生かし、将来的には国際交流業務に携
わり、本学国際交流の躍進を通じて大阪大学のさらなる発
展に尽力したいと考えております。

末筆ながらこの場をお借りしまして、関係者はじめ多く
の方々の多大なるお力添えに感謝いたしますとともに、御
礼申し上げます。

バレーボール部

バレーボールの見どころの一つ、刻一刻と変化しつづける戦況にあると思います。バレーボールは「流れのスポーツ」と言われるように、さっきまで圧倒的に不利だったチームが、一つのサーブポイント、ブロックポイントをきっかけに、見違えるほどに活気付き、逆転してしまう、といったケースがあります。そのような試合を見てみると、スリル満点で、勇気付けられます。それだけに、プレイヤーとしてコートに立ち、勝利したときの喜びは、格別なものがあります。

もう一つの魅力、それは、ひとつひとつの迫力あるプレイです。体育館に響き渡る渾身のスパイク、どこまでボールが飛んでも、絶対にあきらめないレシーブ、相手スパイカーの自身を打ち砕き、味方を勇気付けるブロックなど、試合中は一瞬たりとも目が離せません。

他にも、スピード感やセッターのトスワーク、ベンチワ

ークなど、バレーボールならではの面白さが、至るところに見られます。これに観衆の声援が加わり、バレーボールは最高のスポーツとなります。

見ているだけでも楽しいバレーボールですが、やはり一番の楽しみ方は、実際にコートに立ち、ボールに触れることでしょう。我々バレーボール部は、バレーの大好きなあなたにより一層の磨きをかける場を用意しています。

我々バレーボール部の現在の目標は、秋リーグで三部へ昇格すること、そして七大戦優勝です。目標に向かって、部員一丸となり、真剣に練習に取り組んでいます。

我々は、新入部員をいつでも歓迎しています。これを読んで、バレーがしたくなってきたあなた！ぜひ一度、体育館へ足をお運びください。素晴らしい大学生活が、あなたを待っています。



主将 真鍋 賢司(基・化応3年)

コメント

こんにちは。バレーが好きな人お待ちしています。一緒にリーグ戦で戦いましょう！



練習日時・練習場所：

火・水：16：45～19：30 @第2体育館（豊中）
金：17：00～20：00 @第1体育館（豊中）
土：9：00～12：00 @第2体育館（豊中）

部員数：14人

連絡先：主務 市川喬啓 1986.boyfest-eve@ezweb.ne.jp

H P：http://www.eonet.ne.jp/osaka-u-volley/

編集後記

7月25日、大阪大学は今年も天神祭「船渡御」に参加いたしました。今年は、学問の神様である菅原道真公を奉る大阪天満宮で、応援団による奉納演舞も行われ、「大阪に大阪大学あり」を、大いにアピールしました。

社会へのアピールだけでなく阪大と社会との様々な関わりも、今月号で紹介しています。「クローズアップ」の学際融合教育研究プラットフォームも、「ナウスベシャル」での環境リスク管理のための人材養成も、社会人への門戸を開いたプログラムを行っています。他にも阪大は、社会に様々な形でアプローチしています。インフォメーションでは、「中之島講座」をはじめとするいろいろな公開講座、講演会のご案内をしておりますので、学内の方だけでなく学外の方にもより阪大を知っていただければと思います。

（瀬尾）

待兼山会館 レストラン&カフェ「つどい」

豊中キャンパスの西、木々に囲まれた静かな環境の中にある待兼山会館（職員会館）の1階にあるレストラン。

学生でにぎわうキャンパスを一步抜けると、周りを木々で囲まれた落ちついた佇まいの建物があります。職員だけでなく、もちろん学生の利用也大歓迎。

メニューは、日替わりの他、季節のおすすめなど各種定食など充実しています。

「学外のお客様もよく利用されます。予算に応じてパーティーメニューや幕の内弁当も各種取り揃えておりますので懇親会、歓送迎会などに是非ご利用ください。」と岡田店長。

営業時間：11時30分～15時00分、17時00分～20時00分

定休日：日曜・祝日・年末年始、土曜日は予約のみ

問い合わせ先：06 - 6857 - 3715（内2001）



四季の花が咲き誇る憩いの広場

吹田キャンパスの南、薬学研究科附属薬用植物園に隣接する庭園には、300種を超える四季折々の草花が咲き誇っています。ウッドベンチも設置されており、普段は近隣の人達も訪れます。

「研究科のボランティアにより庭園内の各区画を分担してお世話しています。結構研究室（教授）の個性が出るんですよ。普段は忙しいので休みの日に見に来たり、学生達も交代で水やりをしてくれるんです。いい意味で競い合っています。」と同研究科の前田教授。暑い夏の盛りに、麦わら帽子姿で世話をする教授に出会えるかも。



交流協定大学紹介

マヒドン大学(タイ王国)

Mahidol University



マヒドン大学は、Siliraj 病院付属の医学校として1890年に創設された、タイ王国で最初の高等教育機関です。後に、「近代医学と公衆衛生学の父」として名高いマヒドン王子の名を戴いて、大学名としています。今では、医学・公衆衛生学に関係した学部と大学院は、パヤタイキャンパス、バンコク・ノイキャンパス、サラヤキャンパスのすべてに設置されており、これらに学ぶ学生は1万人を超え、全学生の過半数を占めるのが特徴です。しかし、大学本部

のあるサラヤキャンパスには、理工系や人文社会系の学部、大学院が数多くあり、大学全体では16学部、6カレッジ、8研究所を擁し、2万人を超える教職員が働く、タイで1、2を争う総合大学です。

国際化時代を強く意識し、大学院レベルではほとんど全ての学部で英語による教育プログラムがあり、学部レベルでは理学部や International College (学生約1700人)に国際教育プログラムが用意されています。150を超える学術交流協定を締結していますが、大阪大学とは、30年以上も続く交流をもとに、1997年に大学間交流協定が締結されました。また、大阪大学生物工学国際交流センターとの共同研究センターが2002年にパヤタイキャンパスにある理学部内に設けられました。研究者交流事業や国際共同研究が中心であったマヒドン大学との交流も、最近では、学部生や院生の交流を含めて展開しています。

所在地：本部（サラヤキャンパス）

25/25 Moo 3, Phuttamonthon 4 Road
Salaya, Phuttamonthon District Nakhon
Pathom 73170 THAILAND

連絡先：International Relations Division

Email: orbsw@mahidol.ac.th

ホームページ: www.mahidol.ac.th



阪大 NOW No.91 2006 8月号

2006年8月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。

E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp